

ドライサーの一九三〇年代

もくじ

はじめに

一、一九三〇年代ドライサーの諸特徴

二、大恐慌まで

三、ジョン・リード・クラブ

四、『悲劇のアメリカ』

五、NCDPP

六、共産党

七、知識人団体

八、『アメリカン・スペクテーター』

九、『人間という名のメカニズム』

村
山
淳
彦

十、スペイン戦争

十一、『アメリカは救うにあたいする』

おわりに

注

略年表

はじめに

ドライサーが作家として活動した十九世紀末から半世紀にわたる期間のうちでも、一九三〇年代についての研究はもっともおくれている。この時期のドライサー像は、研究書や伝記においてもたがいに矛盾する記述があったり、ごく簡単な走り書き程度にとどまったりしている。その結果一九三〇年代のドライサーについては、せいぜい共産党を支持しつづけた稀有なアメリカ人作家という程度の見方ぐらしか一般には知られていない。この間彼が小説作品を発表しなかったという事実を暗黙のうちに口実とすることによって、このような研究上の空白、あるいは疎漏が大目に見すごされてきたのであろう。しかしある意味ではこの時期のドライサーこそ、彼の一生を通じてもっとも活躍したのであり、アメリカや世界の人びとの耳目をもっとも頻繁に引きつけたのである。

本稿は、一九三〇年代におけるドライサーの著作や発言や行動を叙述することによって、この作家の比較的知られていない一面に照明をあて、彼についての作家論を補完しようとするものである。と同時に、一九三〇年代のアメリカ社会にある特殊な角度から描き出すという企図もあわよくばはたしたい。一般的にいつて伝記は歴史研究の一特殊形態であるからというだけではなく、ドライサーは二十世紀前半を通じてアメリカ合衆国における反体制の文化的象

徴でありつづけたように、一九三〇年代においても時代の中心的な矛盾を体现していたから、このようなねらいもあながち見当ちがいなものとはいえないと信じたい。

本稿はさしあたり、ドライサーの著作や行動を手がかりに、一九三〇年代アメリカ社会の理解をめざそうとするものである。だが本稿は、ドライサー研究の欠落を埋めて作家の全体像に迫り、彼の文学的業績の意味を解明しようとする試みの一部をなすものでもある。換言すれば本稿は、時代の状況をしかるべき程度の具体性において視野におさめなければ、作家の著作や行動の意味を十分にいきらかにすることができないと考え、調べた結果のまとめでもある。そのために本稿には、ドライサーとは直接関係のない歴史的事実への言及を多くふくむことにもなったが、それはここで取り組んだ課題の性質上避けがたいものと諒解していただきたい。

一、一九三〇年代ドライサーの諸特徴

一九三〇年代のドライサーには、顕著な特徴がいくつか指摘できる。そのうちでもナンバー・ワンとしてあげるべきものは、何といっても左翼運動への積極的参加であろう。もちろんこの十年間は、大恐慌大不況下、社会運動、革命運動が活性化して、「赤い十年間」と呼ばれるにいたった時代であり、多くの知識人、芸術家、作家が政治や社会の諸問題に関与したことはよく知られた事実なので、この点でドライサーが特異であったというわけではない。しかしドライサーは、他の作家等とくらべてもとよりわけそのコミットメントの一貫性、徹底性においてめざましく、しかも以前の思想から一見したところ大きく方向転換した回心の例としてきわだっている。それが最後には晩年の共産党入党という劇的な身振りでしめくくられたから、死後のドライサー評価は、彼の文学作品についての議論だけではす

まず、彼の政治活動についても何らかの態度決定を迫るものとなった。そのために、この期間のドライサーがどのように政治や社会にかかわったかということは、場合によってはドライサー評価全体をも左右しかねないほどの重要性を有し、三〇年代ドライサーにまつわる諸問題のなかでも中心的な位置を占める。

一九三〇年代ドライサーの第二の特徴は、社会運動に関与したということと密接に結びついている。それは、この間彼が小説家というよりも、むしろ評論家、あるいは社会運動の指導者ないしオピニオン・リーダーとしての役割を演じたということである。そしてこのことと結びついているもうひとつの特徴として、この時期ドライサーの著作上の最大の目標は小説等の創作でなく、人生と宇宙の本質を論じる哲学的な理論体系の完成におかれたという事実をあげることができる。これら二つの事柄はいずれも、小説家であることをやめていたということがこの時期のドライサーの特徴となっていたことをしめしている。

一九三〇年代にドライサーが小説を書かなかったことについては、それを創作力の衰えに帰する議論がある。また一部には、彼が政治にふりまわされ、とりわけ共産党にひきまわされたためとする議論すらある。いずれにしてもこの時期のドライサーは小説を書きたくても書けなかったとする見方である。しかしいろいろな事実を考え合わせるならば、この時期彼が小説を書けなかったのは、彼自身の関心がむしろ小説以外の方面に向かったせいであり、そもそも創作にはあまりこだわっていなかったことに由来するとみなせる。

たとえばドライサーが一九三六年に書いたH・L・メンケン宛ての書簡には、つぎのような一節がある。

私には、小説というものは死にかけているという気がしてなりません。それは単に〔小説作品の出版〕過剰のせいだけではなく、映画や、ラジオや、やがて確実に出現するにちがいないテレビのせいでもあるのです。そののみ

か、輸送手段、宣伝広告、交易通信の自由の大発展のせいでもあります。阿呆でもわずかな刺激に反応するものですし、わが国のかつての読書人は、われもわれもと小説や短篇に手を染めだしています(1)が、そのあげく行き着く先は結局ハリウッドといった調子です。

ここには、小説が「死にかけている」という現代文学者に特有の感覚に、ドライサーもとらわれていたことが見られると同時に、小説創作にはとんど見切りをつけようとしていた姿勢もうかがわれる。

小説家であることをやめたドライサーは、社会改革家、あるいは哲学者としてファウスト的な企てに乗り出した。文筆により、あるいは公人としての影響力の直接的な行使により、社会を動かそうとする努力においても、世界の窮極の真理を説明しようとする努力においても、ドライサーは大まじめであった。彼があらぬ方面に精力を傾けたことについては、小説家本来の道を踏みはずすものとみなし、精力の浪費を惜しむ見方や、作家としての資質の不足を証明するものとする見方が出てきた。当時シャーウッド・アンダーソンがドライサーに書いた忠告めいた手紙も、このような見方に立っている。

あなたのような、場合によっては私も同じなので私たちのようなといってもよいのですが、あなたや私のような人間のなすべき仕事は、人生の単純な物語を語ろうといつも努めることです。(中略)あなたが話題にするこの糞いまいましい科学とか、機械の発達などというものは、こういうもの一切(「破綻しつつあるアメリカ人の生活」)にとって何の助けにもなりません。だがあなたの御仕事の別の部分、つまり物語を語るということは、かならず世の中の役に立つのです。(2)

これに対してドライサーは、アンダソンへのあたたかい友情をすこしもそこなうことなく、しかし彼らしい頑固な調子で、「科学は退屈でも、無味乾燥でもないことはたしかですし、狭い意味における機械的なものですらありません⁽³⁾」と返事を書いて、考えを変えようとはしなかった。彼にとつては創作も、いわば「力への意志」のひとつの表現手段であるにすぎず、人生の活動全体の一部なのであって、けっしてそれにすべてを賭けるべき切り札でもなければ、そこに閉じこもるべき聖域でもなかった。だからこそ一九三〇年代における彼の諸活動は、彼にとつては作家としての大道からの逸脱や精力の無益な浪費ではなく、むしろ本来の人生目標に接近しようとする試みにほかならなかった。本稿では、ドライサーの一九三〇年代における諸活動のうち、以上述べた二つの特徴、すなわち政治や社会運動に関与したという点と、創作よりも評論や哲学的著作に没頭したという点に関連するものを取りあげることにする。ただしこの時期のドライサーの活動には、それまでの時期に見られなかったような特徴をほかにもいくつか指摘できる。それらについては以下本章で粗描するにとどめる。

この時期ドライサーが新たな興味をしめした分野として目立っているもうひとつのものは、映画である。ドライサーは『アメリカの悲劇』の成功によって、この作品のみならず、それ以前の作品についても、その映画化権をハリウッドの映画会社に売りつけることができるようになった。そのために彼の経済は大いにうるおったが、同時に彼は当時急速な成長をしめしていた映画産業と直接関係することになった。なかでも『アメリカの悲劇』映画化をめぐる一連の悶着は、映画とドライサーとの関係をしめす注目すべきエピソードをたくさんふくんでいる。

まず映画化権を映画製作会社に売るにあたって、ドライサーは原作小説の出版社主ホールズ・リヴライトと喧嘩になり、裁判沙汰を起こした。また映画化のためのシナリオ執筆に関しては、はじめアイヴァ・モンタギュと訪米中だ

ったセルゲイ・エイゼンシュテインによって書かれ、ドライサーの支持を得たものが用意されたにもかかわらず、映画製作会社パラマウントはそのシナリオが社会批判を強調しすぎていることをおそれて採用しなかった。そのかわりにパラマウント社が用意したシナリオは、サミュエル・ホッフエンスタインとヨーゼフ・フォン・スターンバーグの手になるものであった。この脚本により製作された映画は原作を侮辱するものとしてドライサーの気に入らず、一九三一年この映画が完成したときにまた裁判に訴えて、公開を阻止しようとした。結局彼はこの裁判にも敗北するのであるが、この裁判の意義については、ドライサーについてのこれまで最大の伝記を書きながら大体はドライサーに対して嘲笑的な姿勢をとっていることで顕著なスワンバーグすらも、つぎのように述べている。

パラマウントに対するドライサーの訴訟は、映画製作にあたっての原則という比較的新しい問題にかかわるものであった。すなわち、映画とは芸術とみなされるべきか、それとも単なる娯楽とみなされるべきかという問題である。それまで自作の脚色についてこんな騒ぎを起こした小説家はいなかった。映画産業はまだ新興産業で、物語の素材のあつかいにかけても手軽でおざなりなやり方に慣れていたもので、大多数の小説家や批評家すら映画を粗製濫造の娯楽作品とみなすようになっていたし、事実大部分の映画はそういうものであった。ドライサーは、映画製作所にはシリアスな作品に誠実で聡明な解釈をほどこす義務があるという考えを主張して、ハリウッドに衝撃を与えた。⁽⁴⁾

したがって、『アメリカの悲劇』映画化をめぐるドライサーの闘争に対するスワンバーグの最終的評価は、たとえばドライサーが裁判に敗れたとしても、全体としては当然ながら肯定的なものである。

「裁判に敗れた」にもかかわらずドライサーは、ある程度の精神的勝利を獲得した。バラマウントにいくつかの譲歩をさせることができたし、誠実な映画化を要求していくことの必要性に対する小説家たちの意識を高め、ハリウッドの独善的な態度にちょっとばかりショックを与えたからだ。⁽⁵⁾

ドライサーと映画との関係は、彼が最後に結婚することになった愛人ヘレン・リチャードソンを通じても形成された。というのは、ヘレンは映画女優としてのちょっとした地位を築いたので、ドライサーはヘレンと暮らしを共にするために、一九二〇年代からハリウッドやその近辺に住んだからである。その結果ドライサーは映画界の内幕を知りえたし、チャーリー・チャプリンなどの映画人の知己も得た。

また、一九三〇年代には創作をほとんどしなかったドライサーも、映画では、いかにも三〇年代らしい社会性の強いテーマの作品に取り組んだ。それは、一九〇六―七年にケンタッキー、テネシー両州で起こったタバコ農民の争議を描いた、『タバコ』と題する映画の製作であった。そのシナリオは一九三三年にほとんど完成したが、結局映画はできず、後に別の作家によってこのシナリオがとりあげられ、小説に書き直されて出版された。⁽⁶⁾

以上見たように、ドライサーと映画との関係もけっして幸せなものではなかったが、一九三〇年代、とくにその前半において、一方で小説に見切りをつけたドライサーが、新しいメディアとしての映画にかけた期待はなみなみならぬものであったといえよう。この結果、後注でしめしたように映画や映画界の実態を論じる文章もすくなくならず執筆された。⁽⁷⁾しかしその論調は、ハリウッド映画の内容や、映画界内部の墮落に対する批判・糾弾を主とし、その調子も年を経るにつれてますますきびしくなった。

皮肉なことにドライサーは、映画に期待をかけながらたえず裏切られ、苦い思いをなめさせられてきたにもかかわらず

らず、かつてなかったほどの経済的な安定を手に入れられたのも、自作の映画化権の譲渡のおかげによるところが大きかった。たとえば『アメリカの悲劇』映画化権だけでも、一三万五千ドルという、当時としては莫大な金額をもたらした。これらの収入のためにドライサラーの懐具合はとてよくなった。ある手紙のなかに見受けられる彼自身の見積もりによる資産状況は、つぎのようなものである。

噂によれば私は百万長者ということになっています。私にとって絶頂時是一九二八年でした。そのころ私は六十万ドルもっていました。あるいはもっているかと思っていました。だが間もなく目減りしていき、二十万ドルになってしまいました。それから十万ドルです。一九三二年の秋には、キスコ山の別荘と五万ドルの金貨をもっていました⁽⁸⁾が、金貨の方はルーズヴェルトによって回収されてしまい、そのかわりに紙幣を押しつけられました。

実際はこれよりも金持ちだったらしいが、かりにこの手紙の数字が正確だとしても、これだけの財産は、大不況下多くの人がとが貧困にあえいでいたのと比較すれば、たいへんめざましいといわなければならぬ。この経済的な余裕は、一九三〇年代のドライサラーを考へる場合に無視できぬもうひとつの特徴である。そのおかげでドライサラーは彼のドル箱たる小説の新作執筆に、さしあたって追いまくられずにすんだ。それに彼は、『アメリカの悲劇』完成によってそれまで追求してきた文学上の課題を一応達成し終えたと感じたのだろうと思える節があるが、そうだとすれば小説以外の方面に関心が赴くのも当然で、経済的余裕はこの転進を可能にする不可欠の条件でもあった。

経済的余裕のおかげで可能となったもののなかには、道楽にふけるということもある。この時期ドライサラーが以前にもまして多情な女性遍歴の傾向を強めたことも、成功によって得た自信とも関係しているし、財力をもったことに

も結びついている。また彼は、ニューヨーク市の北、キャツキル山地のキスコ山に別荘地を購入し、そこに「イロキ（"Iroki"）」と名づける風変わりな邸宅を建てたが、これに一九三〇年代前半を通じておしみなく金を注ぎ、趣味と思いつきにまかせて増築していった。このようなところにも、ドライサーがもう世間の目を気にせずにはいままの振舞いをするようになったという、この時期に特徴的な姿勢がうかがえるであろう。

ドライサーの一九三〇年代はいくつかの時期に区分することができる。後掲の年表を見れば容易に気づくであろうが、ドライサーの政治参加は一九三二年を頂点とする時期と、一九四一年を頂点とする時期とに二分され、しかもその中間にあたる時期（とりわけ一九三六―七年）は彼の政治活動が不活発であったので、ドライサーの一九三〇年代が大ざっぱに三つに区分される。このうち第一期にあたる時期のドライサーは、主として大不況下の合衆国内の改革に関心を集中させていた。この時期の代表的著作は『悲劇のアメリカ』（一九三二）である。中期は科学の研究に没頭し、一種の宇宙論を書きあげようと熱中していた時期であって、結局この企図は達せられず、死後三十年もたってから他人の手によって『人生に関する覚え書き』（一九七四）として編集されることになる、大きな断片を残したにとどまる。後期は世界の情勢が緊迫してくるのに対応して、主として外交問題に関心を集中させていた時期で、ブロードサイドやバンフレットなどをつぎつぎに出しては意見を公表したが、主要著作としては『アメリカは救うにあたる』（一九四一）があげられよう。

以下おおよそ年代順にドライサーの一九三〇年代の活動をたどりながら述べることにする。

二、大恐慌まで

ドライサーの活動は『アメリカの悲劇』（一九二五）発表後転換期を迎える。その後も著作活動が衰えたわけではない。しかし小説の創作という点に関しては長い間等閑に付され、結局次作は彼の死後出版された『とりで』（一九四六）まで待たなければならなかった。

『シスター・キャリー』から『アメリカの悲劇』にいたる四半世紀におよぶドライサーの著作活動は、アメリカの社会現実を直視し、そこに見られる非人間性をあばいて批判するという課題を小説創作によっていかになしとげられるか、という問題の追究過程とみなすことができよう。アメリカ社会に彼が見出した病根とは、英語でマテリアリズム (materialism) と呼ばれる風潮である。マテリアリズムは唯物論と訳される場合もあるが、ここではその意味ではなく、一般に物質主義と訳される意味での概念である。物質主義とはかならずしも熟した日本語の語彙とはいえないが、精神的な諸価値をなおざりにし、物質的な価値しか信じない態度の謂であり、マルクス主義の用語法では資本主義社会のもたらす物神崇拜と呼ばれるものにほぼ等しいであろう。

ドライサーがアメリカの社会に生きる諸個人の、この物質主義にとらわれている姿を描き、その迷妄、幻想をテーマに小説を書きつづけたということは、マルクス主義的な見方からすれば、アメリカ社会を資本主義社会としてとらえ、資本主義社会に生きる人間の疎外された意識を書きつづけたということにはかならない。したがって『アメリカの悲劇』にいたるドライサーの諸活動は、このテーマが深まっていった過程とみなすことができるのである。

『アメリカの悲劇』はこのテーマの追求の結果たどりついた一応の結論であった。その結論とは、物質主義にとりつかれた人間には悲劇しかないということである。そこには宗教の無力や偽善、あるいは性道德における偽善やお上品ぶりなどという、合衆国特有の形態をふくめて、資本主義社会の諸矛盾に対する根底からの批判が胚胎している。

ドライサー自身はみずから得たこの結論を、アメリカ社会に対する批判とは考えていたものの、資本主義社会への

批判と自覚できるための知的枠組をもちあわせていなかった。『アメリカの悲劇』発表後の彼の公的発言は、そこに含意されたアメリカ社会批判を確認する一方で、そこから当然の帰結として予想される社会主義や革命の展望は否定する言葉を綴りかえし、個人主義の原理に固執していた。

しかしソ連の共産主義者は『アメリカの悲劇』に内包されている資本主義社会批判を見逃さず、一九二六年十二月にセルゲイ・ディナモフがドライサーにはじめて手紙を書いて以降、ドライサーへの接近をはかってきた。ディナモフは早くからのボルシェヴィキで、ソ連のアメリカ文学研究者として活躍したが、スターリンによる粛清の犠牲となり、一九三七年に姿を消した人物である。ディナモフはドライサー宛てへの最初の書簡で、『アメリカの悲劇』にこめられた資本主義批判に注目し、資本主義にとってかわるべき社会制度として何を期待するかという問いを書き送った。それと同時に社会主義社会建設の実験を視察するためにソ連を訪問するように誘った。

これに対してドライサーは、ソ連にはいつか行ってみたいと答えたものの、社会制度の問題については期待された回答を書くのを拒み、「私には、人生に関する理論や、経済政治問題の解決策などありません。人生とは、私の見るところ、窮極的な分析に達したところでどうすることもできない、組織立った一個の過程なのです」という返事を出した。つまりこの段階では、彼は依然として弱者への共感をしめしつつも、相対主義的な不可知論ないしは虚無主義の立場に立っていたことはあきらかであった。

しかしディナモフとの文通はその後も続き、最初の手紙にあった訪ソの勧誘は、やがて一九二七年ロシア革命十周年記念式典への正式招待となって実現した。こうしてドライサーは、一九三〇年代における彼の考え方を決定的に左右する貴重なロシア体験を得るにいたった。これが可能になった背景には、ソ連共産党の世界革命戦略があった。当時共産党は世界各国の左翼にロシア革命支持、ソ連邦擁護の運動を展開させていたが、進歩的文化人と目される人び

とをロシアに招待し、革命の成果と進行を実際に見聞させることによってその人びとをソヴェエト擁護陣営に獲得しようとしたのも、この戦略の一環をなしていた。革命十周年記念式典にも世界中から数多くの作家、知識人、芸術家が招待されたが、ドライサーもそのひとりであった。

だがドライサーがソ連擁護陣営に加わることは、はじめから明白だったわけではない。それどころか彼は共産主義とはあいまいな思想的立場を表明していたし、ロシア旅行中も模範的な客人だったどころか、ソ連政府を困惑させる難題をもち出しては、それがすみやかに受け入れられないからというので激怒したりした。にもかかわらずソ連共産党の見込みは、結果的には的中したというべきであろう。ドライサーはロシア旅行後長期にわたってこの経験の影響をあらわすようになった。もちろん彼の左傾化は、単にロシア旅行の影響の結果とのみみなすべきではなく、合衆国内の階級闘争の力学的作用の結果でもあったろうが、ロシア見聞が重要な衝撃を与えたこともまた確実であろう。

ロシアでドライサーが得た見聞は、彼の著書『ドライサー、ロシアを見る』(一九二八)にあきらかである。この著作には紹介すべき内容が多くあるが、本稿の主題である一九三〇年代の前段階に属することでもあり、すでに拙稿「ドライサーの旅行記」で論じたこともあるので、省略する⁽¹⁰⁾。ただここで確認すべきことは、このロシア旅行後、ド

ライサーのアメリカ批判には、単なる否定的契機にとどまらず、現実のアメリカ社会にとってかわるべき積極的な展望がだんだん姿をあらわすようになったことである。あまのじゃくの彼らしく、ロシアでは共産主義のあらさがしに終始しているように見えたのに、帰国後は社会主義に敵対的なアメリカの世論に挑戦するようにソ連びいきの発言を繰り返すようになる。したがってもうこの時点でドライサーのラディカリズムは始まっていたともみなしうる。

ドライサーがロシアから帰国した翌年、一九二九年十月ニューヨーク、ウォール街の株式大暴落に始まる大恐慌は、その後結局一九三〇年代全体を通じて全世界にたれこめた暗雲のような大不況の出発点にしかすぎなかった。このな

かで多くの知識人、文化人が社会問題に直面して、世界観の見直しを迫られる状況に立ちいたった。目立ちはじめたのはマルクス主義と共産主義運動の存在であり、多くの人びとがこれにひきつけられていった。だから彼らにくらべれば、新思想へのドライサーの開眼はかなり早かったといえよう。そういう出せば、ドライサーはすでに新聞記者時代に社会主義思想の洗礼を受けていたし、さらにもっと以前、短かい大学生生活を送ったときにもトルストイなどの社会改革思想の影響を受けていたことも忘れられてはなるまい。

たとえそこまでさかのぼらなくても、ドライサーがアメリカの共産主義運動に接近しはじめたのは、大恐慌以前のことであった。彼が共産党系の雑誌『ニュー・マッセズ』に最初の寄稿をしたのは、彼のロシア旅行からの帰国後間もなく、一九二八年十一月号に掲載された記事「中間選挙についてセオドア・ドライサーの意見」⁽¹¹⁾である。彼はその後『ニュー・マッセズ』や、共産党機関紙『デーリー・ワーカー』に寄稿したり、献金したりしていた。

他方『ニュー・マッセズ』の編集者で、文化戦線における共産党の有力なカードであるマイケル・ゴールドは、ゴールド自身の回想によれば、ドライサーとは一九一六年以来の古い友人であったが、ドライサーのロシア旅行後一層親しくなっていたことが、ドライサーの『書簡集』から知れる。⁽¹²⁾

ドライサーと『ニュー・マッセズ』やゴールドとの関係は大恐慌以前にもこのようなものになっていたから、彼が大不況のもとで共産党の運動に接近していったことは、いわば自然の成行きだった。

三、ジョン・リード・クラブ

一九二九年十月、大恐慌勃発と同時に結成されたジョン・リード・クラブ (John Reed Club. 略称 JRC) は、

『ニュー・マッセズ』に依拠していた寄稿家たちの集団を文化運動機関として組織したものである。このJRCは一九三〇年代前半のアメリカ革命文化運動のひとつの焦点になったが、ドライサラーはJRCの運動に最初から協力していた。一九三〇年三月には、反共のための宗派合同祈禱会を招集しようとした聖職者たちに対してJRCが起こした抗議運動に、ドライサラーは賛同を表明した。同年六月には、後に触れる国際労働擁護会のためにJRCがおこなった募金カンパニアに協力している。さらに同年六月ドライサラーは、JRCから言論の自由抑圧に反対する声明を求められると、短かい声明を発表するだけでは満足せず、『ジョン・リード・クラブの回答』と題するリーフレットを出版して世論に訴えた。

JRCは、一九三〇年十一月六〜一五日ソ連ハリコフで国際革命文学局 (International Bureau for Revolutionary Literature) が開催した第二回革命文学世界大会 (普通ハリコフ会議と略称される) に、ゴールド、ウィリアム・グロッバー、ジョシュア・クローニッツら六人の代表を派遣した。二十二ヶ国からの代表が参加したこの大会で国際革命作家同盟 (モルプ) (International Union of Revolutionary Writers 略称IURW) が結成され、その機関誌として『インタナショナル・リテラチャー』が発刊されたが、この雑誌にはやがてドライサラーの文章がたびたび掲載されるようになる。ハリコフ会議の「アメリカに関する決議」では、エドマンド・ウィルソン、ウォルドー・フランク、フランツ・ボアズとならんでドライサラーの名が、「反動アメリカに対するわれわれの戦闘において、われわれに参加しようとしている」「知識階級者」としてあげられていた。⁽¹⁴⁾

ハリコフ会議後、IURWのアメリカ支部となったJRCは、「アメリカに関する決議」で指示された十項目の課題を遂行すべく、精力的な活動を展開した。一九三一年六月十四日ニューヨークで労働者文化連盟 (Workers Cultural Federation) が結成されたのも、JRCの尽力によるところが大きい。これは日本のコップにあたる団体で、

ニューヨーク市にかぎられるとはいえ、文学のみならず、演劇、舞踊、スポーツ、音楽、美術、映画、出版、教育団体、読者クラブなど、広い分野にわたる約一三〇におよぶ文化団体の連合組織であった。この連盟のマニフェストが、一九三〇年代の革命文化運動のテーゼとして名高い『芸術は階級闘争の武器であるー (Art Is A Class Weapon)』である。ドライサーはこの連盟の名誉委員として、ウィリアム・Z・フォスター、ジョン・ドス・パソス、ラングストン・ヒューズ、アプトン・シンクレア、ルードウィッヒ・レン、アンリ・バルビュス、魯迅などとともにまつりあげられた。

他方JRCは、シカゴ、フィラデルフィア、デトロイト、ボストン、サンフランシスコ、ハリウッド等、ニューヨーク以外の全米各都市にも支部を拡大していき、やがて一九三二年五月には第一回全米ジョン・リード・クラブ大会が開催され、JRCは合衆国ジョン・リード・クラブ連合 (The John Reed Clubs of the United States) として全国組織へ再編成された。この大会でもドライサーは、ゴリキー、ロマン・ローラン、ドス・パソス、藤森成吉、魯迅などとならんで名誉委員に推薦された。もともとこのときは、ルイ・アラゴン、マルカム・カウリーなどと同様、彼は結局名誉委員に選出されなかった。

この後JRCは、一九三四年の第二回全米ジョン・リード・クラブ大会開催を最後にして、一九三五年四月第一回アメリカ作家会議 (American Writers' Congress 略称AWC) で創設されたアメリカ作家同盟 (League of American Writers) にとってかわられていくが、ドライサーとこれら左翼文学団体との関係は、かなりよそよそしいものにとどまった。JRCやAWCでドライサーの名が名誉委員などという形で出てくることがあっても、具体的な協力や関与という段になると、ドライサーはむしろ敬して遠ざくというべきあつかいを受け、彼が創立当時のJRCに物心両面からの援助を与えたときのような密接な関係は、二度とふたたびもたらされなかった。文学運動に属して組織的活

動に従事するにしては、ドライサーはあまりにも自己主張が強すぎるか、あまりにも大物すぎるということだったのであらうか。

四、『悲劇のアメリカ』

話は若干前後するが、ドライサーは大恐慌後アメリカ国内各地の人びとがどのような暮らしを営んでいるかということに関心をもち、全米を股にかけた大旅行に出かけた。その行程は、一九三〇年三月ニューヨークを発ち、南西部を経て太平洋沿岸にいたり、さらに北西部をまわってシカゴに立ち寄り、ニューヨークへもどってきたのは七月初めのことである。これは、大不況下の国民生活の実態に関心をもった作家による視察旅行のもっとも早い例となる。ほかにもたとえば『アメリカの神経症』（一九三二）にこの種の旅行による見聞をまとめたエドマンド・ウィルソンがいるし、シャーウッド・アンダーソンにも『困惑せるアメリカ』（一九三五）がある。しかしドライサーは、かつて『四十歳の旅人』（一九一三）とか『フージアの休日』（一九一六）とかのおもしろい旅行記を書いたことがあるにもかかわらず、この不況視察旅行の「見聞を旅行記という形でまとめることはしなかった。そのかわりに彼が書きあげたのは、『ドライサー、ロシアを見る』が旅行記というよりもむしろ社会評論であったように、長大な社会評論の書であった。これが『悲劇のアメリカ』（一九三一）である。

『悲劇のアメリカ』は、大不況に突入したアメリカ社会の現状を多角的に分析し、その惨状を訴えて打開の方向を提案する。冒頭三章にわたってアメリカ国民一般の生活窮乏状態が描き出された後、銀行と大企業が政府と癒着し、政府を利用して暴利をむさぼっている実態、鉄道会社の暴利、運輸会社の腐敗、最高裁判所の大資本奉仕、連邦憲法

の反古化、労働運動 A.F.L. の墮落、合衆国の警察国家化、宗教界の墮落、慈善団体の欺瞞、犯罪の増大、選挙制度の無効、教育制度の矛盾等々、アメリカ社会に見られる欠陥をつぎつぎに暴露していく。ここで糾弾されている大企業のかずかずの横暴は、いわゆる国家独占資本主義体制に特有の実態である。つまりドライサーが本書で指摘するアメリカ社会の問題点とは、資本主義一般の矛盾というよりも、その特殊な段階としての国家独占資本主義体制にともなう腐敗にしばられている。

本書の最終章、第二十二章「新政治をめざす諸提案」は、富の分配における均衡 (balance) をはかるために体制の抜本的変革が必要であると主張している。富の再分配により新しい均衡をめざすというのは、マルクス主義的な意味における社会主義革命とは異なるであろう。なぜならば社会主義革命は、分配ではなく生産の場面における搾取制度の廃絶、資本主義の根本矛盾である生産手段の私的所有の廃止をめざすものであるはずだからである。したがってドライサーのいわゆる均衡とは、生産手段の私的所有に手を触れない社会改革の目標であるとみなされる。大ざっぱに言ってそれは、その後の共産主義運動で認められるようになった社会主義革命にいたる中間段階としての革命、反独占の民主主義革命の目標に通じるものであろう。

この目標を実現するための政權構想としてドライサーは、「人民自身によって確保され、統御される強力な中央権力」⁽¹⁵⁾の樹立を提起する。この権力はあきらかに合衆国の既存政治制度の枠内におさまりきらない性格のもので、独占資本による独裁にとってかわるためにはどうしても必要な強硬政策をも実行できる政權でなければならない。このことをドライサーはつぎのように表現している。

私が提起するものは、アメリカの勤労大衆のための執行権力である。それはモスクワの共産党中央委員会に似て、

今日アメリカをおかしている社会的経済的病疾について徹底的に研究したアメリカ人男女（かりにそのような人びとがいるとして）から構成される⁽¹⁶⁾。

『悲劇のアメリカ』は、統計資料や独占資本の醜聞記事などを列挙し、繰りかえしが多く、ゴタゴタした議論をながながと展開する読みにくい本である。また本書における議論は、現実に対する批判と提起された解決策とのあいだの媒介に欠け、現実についての積極的肯定的把握からその現実内に在する契機の開出へと進むことにより解決の道筋をしめすという理論的な手続きに欠ける。つまりここには、国家独占資本主義体制の支柱たる一握りの独占資本家と極反動層を孤立させるべき戦略目標として、広汎な人民大衆の統一戦線をいかに構築すべきかという問題意識が欠けており、プロレタリア独裁を標榜するソ連の政体から類推した政権構想が、その必然性についての論証なしに出てくる。この点が、本書を社会改革のための提案として見た場合、最大の弱点であろう。

しかしドライサラーは、『悲劇のアメリカ』の執筆、刊行のために多大の犠牲を払い、つねに四、五人の女性秘書をやとって資料を集めさせ、大まじめに全力を傾注した。その結果書きあげられた本書の欠陥を今日指摘することは容易である。だが大恐慌に驚き、心を痛めて、アメリカ社会再建策を提案したのはドライサラーだけでなかったし、出されたのはできのよい案ばかりでなかった。独占資本の側からは、GE社長ジェラード・スウォープが中心となって、反トラスト法停止、独占集中の促進を提言した「スウォープ計画」が発表された（一九三一年九月）。学者のなかからも、後のニューディラーの中心メンバーとなるコロンビア大学経済学教授レクスフォード・タグウェルが政府による経済統制を提唱し、チャールズ・ビアードが「アメリカのための五ヶ年計画」を発表した（一九三一）。AFLも独占化促進を承認するかわりに組合の団結権を政府に認めさせようと取引きをはかり、労資協調体制による不況克服

を訴えた。南部詩人、作家たちは論文集『私は独自の立場をとる』(一九三〇)を発表し、農本主義への復帰を訴えた。その他、ニューディールが登場した前後の時期までふくめて考えれば、ハワード・スコットの提唱したテクノクラシー運動、アプトン・シンクレアによるE P I C運動、ヒューイ・ロングの「富の分配」運動、フランシス・タウンゼンドの起こした養老年金要求運動等々、いわゆる「万能薬」運動がかえきれないほど現われた。ドライサールの『悲劇のアメリカ』にあらわされたアメリカ救済策も、このような全米の動向の文脈のなかに据えてとらえかえされなければならぬ。

五、NCDDPP

一九三〇年代初期にドライサーが左翼運動に関与したさまざまな形のなかでもっとも重要だったのは、全米政治囚擁護委員会 (National Committee for the Defense of Political Prisoners 略称NCDDPP) 委員長としての活動である。NCDDPPは国際労働擁護会 (International Labor Defense 略称ILD) の下部組織であるが、ILDとは、コミンテルン系の労働運動国際組織プロフィンテルン (Red International of Labor Unions 略称RILU) の支持を受けて結成された救援運動組織であり、国際的にはモップルとして知られていた機構に連なるものであった。ILDは共産党系の大衆組織であったが、この運動をさらに強化する目的で一九三一年四月にNCDDPPが結成された。それはハリコフ会議の「アメリカに関する決議」の実践の一環でもあった。⁽¹⁷⁾ ドライサーはNCDDPP結成にあたり、その初代委員長に就任することを引き受けたのである。

NCDDPPの結成会は、マンハッタンの広大なアパートに構えたドライサーの仕事場で多数の作家、知識人を招集

して開催された。そこに招かれたひとりである批評家マルカム・カウリーは、一九三〇年代の回想録の一章を割いてこの一夜の様子を描き出している。「私はセオドア・ドライサーのスタジオにおけるある会合への招待状を受けとった——それはほとんど王からの召喚状に等しかった⁽¹⁸⁾」と書きおこされたこの文章のなかで、カウリーはNCDDPPについての彼自身の見方をつぎのように述べている。

実際この委員会は、国際労働援護会の作家芸術家支部であり、国際労働援護会は共産党が法律関係業務と政治宣伝のために作った補助機関であった。共産党と結びついているということは公然の事実であって、そこに何の秘密もありはしなかった。この時代のならわしにしたがって大仰な頭文字の羅列を用いるならばNCDDPPと称される。この組織は、私の思うに、中産階級のシンパをまきこむために考案された何百という「統一戦線組織」のなかでもっとも初期のものであった。私にとってそれは（三つか四つかの編集委員会を除けば）私が大学卒業以来はじめて加入した組織であった。⁽¹⁹⁾

NCDDP委員長としてのドライサーは、当時の共産党の諸活動のなかでもっともマスコミの脚光をあびた運動の先頭に立つことになった。当時共産党指導下のキャンペーンのうち、そういう種類のものとしてすくなくとも三つの運動をあげることができる。第一にトム・ムーニー釈放運動、第二にスコツポロ事件容疑者救援運動、そして最後にハーラン炭鉱ストライキ弾圧犠牲者救援運動である。以下それぞれについて簡単な説明を与える。

トム・ムーニーは、一九一六年七月、第一次世界大戦への合衆国参戦促進運動の一環としてサンフランシスコでおこなわれた軍備拡張キャンペーンのパレードに、爆弾を投げつけたかどで逮捕されて、死刑宣告を受けた無政府主義

者の政治囚であった。これを冤罪とするムーニー釈放要求運動は国際的ひろがりをしめし、ロシア革命のときには決起した民衆によっても支持されていたことが、ジョン・リードの『世界をゆるがした十日間』に描かれている。⁽²⁰⁾しかし、釈放要求運動のひろがりにもかかわらず、一九三〇年代に入ってもムーニーは依然として獄中にあった。ドライサーは、サッコとヴァンゼッティの処刑のとき（一九二七年）には、全米の進歩的知識人もまきこんでもりあがった抗議運動に加わらなかったが、一九三〇年の大不況視察旅行のときは、JRCの要請にこたえてサン・クエンティンの獄中にムーニーを訪れ、その救援運動に取り組みはじめた。ドライサーはカリフォルニア州知事や、新聞王ハーストなどに働きかけて、ムーニー釈放を各方面に訴えた。このムーニー釈放運動のために動きはじめたということが、ドライサーがNCDDPP委員長に就任することになった直接のきっかけであろうとも考えられる。ドライサーはその後ムーニーに手紙を書いて励ましつづけ、一九三二年にはふたたび獄中のムーニーを訪れている。それでもムーニー釈放は、一九三九年、ニューディール派の知事が当選したときまで実現しなかったのである。

スコッツボロ事件とは、一九三一年三月に起こった、九人の黒人少年に対する強姦容疑の事件である。この九人は放浪者として貨車に乗ったときに七人の白人青年、二人の白人女性と乗り合わせ、白人とのあいだに喧嘩を引きおこした。その結果彼ら黒人少年たちは二人の白人女性を強姦したとされ、アラバマ州スコッツボロで逮捕されて、九人全員死刑の判決を受けた。これに対してNCDDPPは救援運動を展開し、ドライサー委員長はアラバマ州知事に公開質問状を出したり、批判論文を書いたりして九人の無実を訴えつづけた。そのために死刑執行延期をちとり、再三にわたり死刑判決破棄を迫る控訴にもちこむところまでこぎつけた。それでもなかなか無罪放免とはならず、九人のうち四人は一九三七年まで、四人は一九三八年まで勾留され、最後の一人が釈放されたのは、第二次世界大戦後一九五〇年に、獄中生活二十年を経た後のことであった。

この事件は、南部がアメリカ国内最大の癌として意識されるようになるひとつの大きなきっかけとなった。南北戦争後いわば国内植民地の役割をはたしてきた地域としての南部は、人種差別や貧困など政治的経済的後進性を解決できずにいたが、それが一九三〇年代の大不況下になってようやく南部だけの問題ではなく、合衆国全体にとっての問題であると、多くの人びとによって認識されるにいたった。この事件後大統領に選ばれたルーズヴェルトは、その演説のなかで「南部は国民が直面する第一の経済問題である」と論じたほどである。アメリカの進歩的知識人のあいだにこのような問題意識が広まったことが、たとえばウィリアム・フォークナーの代表作のひとつ『アブサロム、アブサロム!』で、カナダ人シュリーヴが南部人クエンティンに向けて発する「南部とは一体何か」という質問がテーマとなっているように、南部文学のルネサンスと呼ばれるものをもたらしたともいえよう。スコツポロ事件は、全米国民を南部問題に開眼させる端緒のひとつとなり、南部に共産党が進出する手がかりを与えたという意味で、歴史的な事件だったのである。

以上二つの救援運動においてドライサーはNCDDP委員長としての職責をはたしたといえるが、彼がNCDDP委員長としてもっともはなばなしい活躍をしたのは、つぎに述べるハーラン炭鉱ストライキ弾圧犠牲者救援運動においてである。

ペンシルヴァニア州からケンタッキー州にかけての炭鉱地帯では、炭鉱労働者が不況のしわ寄せたる解雇や賃金カットに抵抗して長期ストを打っていた。アメリカ労働運動史上いつもの例にたがわず、このストライキに対しても暴力による弾圧事件があつた。NCDDPがこの種の労働運動弾圧事件を座視しえないことはあきらかであつた。ドライサーは一九三一年六月にもピッツバーグの炭鉱を視察し、その実態を告発する声明を発表していたが、同年十月ケンタッキー州ハーラン炭鉱視察の要請を受けたとき、そこでの弾圧は銃撃戦やダイナマイト爆破によ

る多数の死者も出していたので、ただならぬ覚悟と準備を必要とすると考えた。

問題を一層複雑にしていたのは、労働運動内部の抗争であった。もともと炭鉱における労働運動では、第一次世界大戦の戦需景気にささえられて、ジョン・ルイスを会長とするアメリカ統一鉱山労組 (United Mine Workers of America 略称 U M W) が A F L 傘下の大労組として勢力を張っていたが、この U M W は、一九二七、八年の大ストライキで敗北、崩壊に瀕していた上に、ルイスが炭鉱主によって買収されているという内部告発があったり、不況下のストライキ権不行使契約を結んだりしていて、影響力をほとんど失っていた。

これに対して W・Z・フォスターがひきいる労働組合統一同盟 (Trade Union Unity League 略称 T U U L) 傘下の全米鉱山労組 (National Miners' Union 略称 N M U) が炭鉱産業に進出し、一九三一年五月から長期ストライキに突入したのである。T U U L はプロフィンテルン翼下であり、コミンテルン第六回大会のテーゼ「第三期論」の影響を受けて、アメリカの労働運動に二重組合主義をもちこもうとしていた。これは後に左翼セクト主義としてフォスターが自己批判することになるが、大不況当初強力な労働運動が待望されていた時期に、T U U L 系の組合だけが大規模な闘争を打ったことも事実である。さらに皮肉なことには、このとき共産党系労組と抗争した右翼的な U M W の頭目ルイスは、のちにニューディール下ワグナー法に助けられて未熟練労働者や自動車、鉄鋼産業の組織化に乗り出し、CIO を結成して A F L から追放されたときに、共産党系の組合活動家集団をもっと頼りにしたのであった。

ドライサーは、炭鉱労働運動弾圧実態調査にかかわるにあたって、このような労働運動内部の抗争に対して超然としてはいられなかった。彼はピッツバーグ炭鉱視察後、A F L 会長ウィリアム・グリーンと公開書簡を交わす形で、激しい論争を挑んだ。

さてドライサーは、ただならぬ情勢にあったハーランに足を踏み入れる前に、N C D P P としてよりはもっと強力

な調査団を組みたいと考え、リベラルな有力者たち、たとえばラフォレット上院議員、ノリス上院議員、新聞社主ロイ・ハワード、記者ウィリアム・アレン・ホワイト、法律家フランクフルターに働きかけた。だがこの試みは対象者の賛同を得られずにみごとに失敗し、しかたなくNCDDPに所属する文筆家たちのなかから危険をおかす勇気のある志望者を募って、結局ドス・バソスやサミュエル・オーニッツをふくむ調査団を結成した。

ドライサー委員会と呼ばれるこの一行の調査報告書は、『ハーランの坑夫は語る』（一九三二）として刊行されている。この本の構成は、冒頭にドライサーがこの調査のいきさつを述べ、自らの社会観を記した「序論」を配し、その後数名による簡単な報告書がならべられているが、この本の主体をなしているのはハーランの炭坑夫とその家族、あるいはその地域の警察官や検事、新聞社主などによる証言の記録である。巻末には、事後十二月六日ニューヨークで催された報告集会に登場したアングソンの演説も収録されている。

この報告書の記録からうかがえるのは、当事者から証言を聴取するやり方に一種法廷のような雰囲気がつきまとい、その法廷を指揮する裁判長の役割をドライサーが演じるという芝居があった演出である。したがって証言記録のほとんどすべてがドライサーの質問に対する答の形になっている。

この本のなかでもうひとつ注目すべきものは、「序論」に見られるドライサーの社会観である。この「序論」の後半部は、「個人主義とジャングル」という題で『ニュー・マッセズ』（一九三二年一月号）や『クロウフォード・ウィークリー』（一九三二年一月）に掲載された文章と重複しており、一九三一年十二月十五日ニューヨークのグループ・フォーラムにおいて講演したときの原稿でもある。

この文章でドライサーはアメリカ社会に見られる不正を糾弾した上で、つぎのように言っている。

今日アメリカ人は、かかるものとしての個人主義を徹底的に研究してみるべきである。その最良のモデルはジャングルに見出せるであろう。ジャングルでは各人が利己的になり、生きのびるためにうろつきまわっては、すきあらば弱者に死を見舞おうとするのである。(中略)／私は繰りかえして言おう。アメリカ人は心のなかで個人主義の行きつく先を思い描いてみるべきである。社会とはジャングルではないし、ありえないからである。社会とは、その名にし負う社会的有機体であるならば、この極端な個人主義からの脱却であるべきであり、事実そうである。個人主義は一部の連中にはすべてがあっても、大多数の者にとっては欠乏や皆無を意味する。そして社会とは、意識的にせよ無意識的にせよ、自然と進化によって個人主義からの脱却たるべくもくろまれている。というわけは、何千年にもおよぶ社会組織の発展が、自然の側もジャングルの極端な血なまぐさい個人主義を避けたいと願っていること、⁽²²⁾ 確実なしるしであるとみなせるからである。

ここからあきらかなように、ドライサーは、たとえば『ドライサー、ロシアを見る』においてすら固執していた個人主義をはっきりと否定し、ジャングルの適者生存の法則について、彼自身が社会進化論に共鳴する自然主義者としてしばしば確認していたのとも対照的な考え方に立つようになっていく。したがってこの「序論」は、ドライサーがかつて公言していたみずからの信条を自己批判して、一九三〇年代に左翼運動へ参加する前に彼がとげた思想的变化を明確にしめたものとして、注目にあたいる。

NCDPPのハーラン視察は大成功であった。現地の警察がドライサーに気圧されて何もできないでいるうちに、調査はドライサーのペースではこぼれ、アレョアレョという間に多くの調査報告を持ち帰ってしまった。ドライサー委員会が去った後、現地の警察はドライサーがホテルで姦通罪を犯したと告発し、裁判へ本人を召喚しようとしたが、

ドライサーは「自分は性的不能だから、不倫を犯したくてもできるはずがない」と声明して、これを一蹴した。

ハーラン炭鉱における実態は、ドライサー委員会がジャーナリズムや集会で発表した報告により全米の注目を集め、労働運動の大義をアピールする絶好の機会となった。そのおかげで現地の司法当局も慎重にならざるをえず、弾圧の緩和という実際的効果ももたらされた。これに励まされたNMUは、一九三二年一月一日より抗議のストライキを再開したのである。

このときふたたびNCDDPの視察団が派遣されたが、ドライサー委員会ハーラン炭鉱調査の後日譚ともいえるべきそのいきさつは、ドライサーの存在の大きさを裏書きするようなものであった。このときの視察団は、ウォルド・フランクを団長とし、エドマンド・ウィルソン、マルカム・カウリー、メアリー・ヒートン・ヴォーズなどをふくむ一行である。彼らは現地に着いた直後何もできないうちに警察と自警団につかまり、夜中ケンタッキー州とテネシー州との州境にある山中に連行されて手ひどくなぐられたあげく、夜闇のなかに置きざりにされた。彼らが見舞われた災厄は、カウリーの回想やウィルソンの日記から知ることができる。このような結果になった原因は、現地の炭鉱主側がドライサー委員会の調査にこりて先手を打ったことに求められようが、カウリーは、フランクには「ドライサーのように人を圧倒する貫録に欠けていた」⁽²³⁾といつて、団長の器量の差が成否を分ける重要な要因だったと指摘している。この事件後、カウリーはむしろ社会運動への関与を深めていったのに対し、ウィルソンは直接行動から退くようになったのは特徴的である。

六、共産党

ウィルソンの『日記』のおよそ一九三二年十一月ごろの記事に、ドス・パソスの観察としてつぎのような言葉が書きつけられてあった。

ドライサーはILDのためのトロイの木馬だという意見——「ジョン・」デューイとドライサーは、それぞれの組織によって山車に乗せられ、かつぎ出されている（ドス・パソスはデューイがトロツキー派によって利用されている⁽²⁴⁾）というのだ。

ドライサーを文化人のなかでも共産党のもっとも積極的な代弁者であるとみなしたのは、ドス・パソスだけにとどまらなかった。

他方共産党の側でもドライサーにきわめて力強い味方を見出し、頼りとした。フォスターは彼の著書『アメリカ合衆国共産党史』のニューディール期における文化運動を叙述する章で、「偉大なセオドア・ドライサーを先頭として、小説家はひどい社会状態にたいしてこれまで見られなかった反抗をおこなった。ドライサー自身は熱心な共産党員となった⁽²⁵⁾」と書いている。また一九七九年に刊行された共産党創立六十周年記念略史には、奇妙なことに文化戦線での闘争史は全然ないが、「あとがき」として党員文化人を代表してドライサーの文章が、黒人作家W・E・B・デュボイスの文章とならんで収録されており、今日にいたるまでドライサーが合衆国共産党史上最重要人物とみなされてい

ることがわかる。⁽²⁶⁾

しかし当時のドライサンと共産党との関係は、実際にはそれほど円滑なものではなかった。ドライサンは共産党が指導する種々の運動に積極的な支持を寄せ、共産党の要請にこたえていろいろな声明を発表したり、賛同者名簿に名を連ねたりしたが、他方自分の知らないうちに無断で名前を利用されることも多く、そういう場合には共産党に強く抗議して、このようなやり方をたえず批判した。行動や執筆にあたって共産党から情報提供や助言を受けたものの、その取捨選択には自主性を貫ぬき、共産党のいうなりになる利用しやすいビッグ・ネームではなかった。

フォスターは、ドライサンが一九三〇年代に黨員になったという誤解を与えかねないような記述をしているが、実際は一九三〇年代を通じてドライサンが共産黨員だったことはない。実はドライサンが一九三二年初頭に共産党への入党を申し込んだことはある。だがこの入党申し込みはオール・ブラウダーによって体よく拒絶された。このいきさつは、一方においては共産主義についてのドライサンの無知、他方においてはブラウダーの冷淡さから必然的に帰結した結果であると解釈するのが、スワンバーグ以来の通説である。さらにドライサンに対するブラウダーの冷淡さの背後には、党指導権をめぐるブラウダーとフォスターとのあいだの軋轢があったとも示唆されている。

大不況に突入して党勢にかつてない活気をしめしはじめた共産党にとって、有効な戦略戦術を見出し、有能な指導者を得ることが緊急課題であった。一九三〇年六月の第七回党大会は、それまでのアメリカ労働者党（共産主義者）（Workers (Communist) Party of America）という党名をアメリカ合衆国共産党（Communist Party of the United States of America, 略称CPUSA）と改称した大会であるが、このとき選出された書記局は、組織関係書記ウィンストン、労働組合関係書記フォスター、党務関係書記ブラウダーの三人からなる集団指導体制をとった。これはやがてブラウダーの書記長体制へ変わっていくのだが、この指導者交替期にともなう摩擦がすでにこのころからあった

と見られる。

しかしドライサーの入党が拒否された理由は、ドライサーの無知のせいや党指導部間の軋轢のあたりをくらったせいだけに帰するわけにはいかない。この時期の国際共産主義運動は「第三期論」にわざわざいわれて、労農政府樹立をめざす極左セクト主義の傾向をもっていたといわれ、この展望のもとで党は、いわゆるレーニン型の党として厳格な規律にもとづく職業的革命家集団の組織をめざす傾向が強かった。このことについてカウリーは、「何故私は入党しなかったか」という自問に答える形で、つぎのように説明している。

党は新入党者の承認には厳格だった。(中略)ドライサーが共産党員だとされ、爪はじきにあっていると聞いて、シャーウッド・アンダソンは、「あの人は私と同様党員なんかじゃない。かりに党員になりたいといってもなれはしない。共産党が受け入れまいからね」といった。それから三年後には党は方針転換し、作家や、その他だれであろうとも、ラディカルの心情を抱いている者にはだれにでも、条件づきでかまわないから入党してくれとおがみた(27)おすまでになった。

この一節の後半でいっているのは一九三五年ごろのことであり、前半で語られているエピソードは、ドライサーが入党を申し込んだ一九三二年ごろのことである。

また、ほかならぬ共産党幹部であったフォスターによっても、このことはつぎのように認められていた。

一九二九―三三年の恐慌期に、共産党員の数は一万すこしたらずから一万八千に増加し、(中略)それにもか

わらず、もしも適切でない組織活動——大衆闘争中には黨員を獲得できないと考える根づよい傾向の結果、とくに生じた——がなかったならば、もっとはるかに多くの黨員を獲得できたはずである。事実、党はほとんど特定の黨員獲得運動の期間中——普通それはあまり政治的に緊迫していない時期だけである——にだけ黨員獲得をおこなうという、わるい習慣におちいりはじめていた。このほか黨員の増加をさまたげた大きな欠陥は、(中略)共産黨員のあいだでさえ、強力な大衆的な共産党をつくりあげることの決定的な重要性が、十分に理解されていなかったことである。⁽²⁸⁾

したがってドライサーの入党申し込みが拒否されたより根本的な原因は、当時の共産党の方針そのものの狭さにあったといわなければならない。高度の機密に属する入党申請のとりあつかいが大部分闇につつまれているのは当然としても、当時ドライサーと親交あつく、ともに酒をくみかわした仲にあったフォスターではなく、ブラウダーがドライサーの入党申請の処理にあたった理由は、ブラウダーが党の指導権をとりつつあったからというよりも、彼が党務関係書記をつとめていたことに求められよう。古いアングロ・サクソン系の家柄に属し、インテリ臭が強くてドライサーとはその合わないブラウダーではなく、労働運動の闘士でアイルランド系の人情家として「まるで聖者のようだ」というドライサーの賛辞を得たこともあるフォスターがたとえ応対したとしても、当時の党の方針のもとでドライサーの入党が承認されたか、疑わしい。

ドライサーは共産党入党申請を拒否された後、NCDDP委員長を辞任した。折角の入党申請を蹴られて気分を害したためと想像されるが、その因果関係はかならずしもはっきりしていない。

他方、共産党の側からのドライサー評価は、先に見たとおり今日にいたるまで賞讃が続いているが、彼の文学上の

業績に対する評価となると、立ち入った批評の対象としてすらあまり取りあげられていず、あいまいさを残している。同時代の共産党系の批評家のなかでドライサーに対する尊敬をもっともはっきり表明したのは、マイケル・ゴールドであろうが、その批評的文章は印象的感想文の域を越えず、しかもその敬意もドライサーの文学作品に対してというよりも彼の勇気ある行動に対して払われているというべきものかもしれない。このようなことは大体すべてのマルクス主義的批評家によるドライサー評価についていえることで、ドライサーに一応賛辞を述べるものの、具体的な分析をとまなう本格的批評をドライサーの作品についておこなう者は少なかった。

そのもっとも典型的な例はルカーチのドライサー評価である。ルカーチの「批判的リアリズムの現代における意義」は、一九五五年秋に草稿ができ、五六年ヨーロッパ各地での講演原稿として用いられた後、五七年に印刷発表されたもので、ある段階における総括的な文章とみなしうる。この「序論」末尾にはつぎのようなドライサーへの言及がある。

今日にいたってはじめてわれわれは、経済的発展の尖鋭化、帝国主義的な時代が、リアリズムの新しい高揚、つまり帝国主義にたいするヒューマニスティクな反逆を生み出した事実を理解する。その場合、民族の土壌に伸びた根は千差万別である。様式的傾向の差はさらに大であるかもしれない。それだけにいっそう目立つのは——この現代という望楼から観測すると——その理念的な共属性であり、これこそ、われわれがヒューマニスティクな反逆と呼んだものにはかならない。この傾向的な親近性を明瞭にみとめようと思えば、アナトール・フランスとロマン・ロランを、ショーとドライサーを、ハインリッヒとトマス・マン兄弟を指摘すれば足りよう。今日の市民的なりアリズムは——客観的・社会的に見るなら——この反乱の継続であって、しかもこの傾向の重要な代表者の幾人か

はわれわれの時代にもなおはたらきを示していたのである。⁽²⁹⁾

ルカーチは、しかしながら、現代文学の偉大な模範となる批判的リアリストの英語圏における代表者としてドライサーの名をあげているにもかかわらず、本論中ではドライサーに一切言及していない。ドライサーが一般に自然主義者とみなされ、他方ルカーチは自他ともに認める反自然主義者であったから、ルカーチがこの一見矛盾しているドライサー評価にどのようにして到達したのか、ドライサーの自然主義といわれるものをどのように理解していたのか、興味深いところであるにもかかわらず、そういう疑問には一切答えてくれない。これは、ルカーチもドライサーには外交辞令的な賛辞を呈しただけだったということを意味するものであろうか。

七、知識人団体

ドライサーは入党拒否という憂目にあったにもかかわらず、共産党支持の態度は変えず、NCDDPの一員としての活動も続けている。当然ながら共産党に対する見方は以前よりも批判的になり、もっと一般国民が親しみのもてる左翼の結集をはかろうとする独自の努力をはじめた。そのありさまは、『書簡集』におさめられたこの時期のいくつかの手紙からもうかがえる。

たとえば、一九三二年春にダラス・マッカウンが左翼的知識人の結集をはかり、知的労働者同盟 (the Intellectual Workers League) の設立を呼びかけて、ドライサーにも参加を要請する手紙を送ってきたのに対して、ドライサーはつぎのような返事を出している。

貴方も御存知のとおり、「知識人」という大ざっぱな言葉であらわされるアメリカの労働者、知的専門職に従事する人等を、何か根本的に有益な団体に組織するということは、私の昔からの念願でした。私は共産党員ではなく、党も私を党員としては受け入れまいということ、また、私はソ連では共産主義がとてまうまく機能していると思うものの、彼地でおこなわれているのと同じ方法が合衆国人民の自治のやり方に効果的に移しかえられるとも、人民に受け入れられるとも思っていないということも、御存知のとおりです。(中略)

アメリカの一般労働者が急進的な教説や傾向とみなしたものは(偏狭といおうと誤解といおうと、事実は変わりません)何であろうと、ほとんど驚異的なまでに容認しようとしないうるさを見慣れた者にとっては明瞭であるにちがいありませんが、労働者は共産主義を自分の運動目標とみなしていませんし、御提案の同盟の活動は目標実現をめざすものというより、願望を表現するだけです。⁽³⁰⁾

ドライサーは、どうやら共産党オルグらしいマッカウンに対して、知的労働者同盟からできるだけ共産党色を払拭するように説得している。と同時にこの組織の設立にたいぶん期待をかけたようで、『書簡集』の編者イライアスのコメントによれば、同じころウィルソン、ルイス・マンフォード、フランク、ドス・バソス、アンダソンらによって同様の知識人団体結成の動きがあったのに対して、マッカウンらの努力に水をさしたくないという理由で支持を与えるのを拒んだ。⁽³¹⁾ここで言及されているウィルソンらの動きとは何であるのか明示されていないものの、ウィルソンの三〇年代の『日記』の編者レオン・エデルが「注」で、「五月にルイス・マンフォード、ウォルドー・フランク、ドス・バソス、シャーウッド・アンダソンとともにある宣言書の起草に従事」と書いているものと同じものであろう。⁽³²⁾

実際の成行きとしては、知的労働者同盟設立の動きは結局流産したようで、この名の団体が歴史に登場したことはない。そのかわりこの時期にあらわれたユニークな知識人団体がフォスターとフォードを支持する知的専門職グループ同盟 (the League of Professional Groups for Foster and Ford 略称LPGF) である。そしてこれは、右に触れたウィルソンらの動きが最終的に結実したものと推定される。ウィルソンの共同起草者としてあげられている作家たちのうちマンフォードを除く全員がこの団体の設立メンバーになっているからである。

LPGFは、一九三二年の大統領選挙にあたって、共産党公認候補フォスターおよびフォード (副大統領候補) を支持する作家芸術家の公開書簡発表をきっかけに結成された。この団体は『文化と危機』という題のパンフレットを発表しただけでなく、選挙終了後も種々の文化活動をおこなったので、選挙運動めあての単なる名目だけの集団ではなかった。これもまたハリコフ会議における「アメリカに関する決議」の具体化であった。⁽³³⁾ カウリーの回想録にはこの団体の幹部をつとめたときの苦心談がふくまれている。

ところでこのLPGF結成のきっかけになった公開書簡の署名者数については、研究者によって異なっており、五二名とも五三名ともいわれている。アーロンは本文中で「ウィルソンおよびその他五二名の芸術家知識人」と、あたかも合計五三名であるかのようにいっておきながら、巻末注にこの公開書簡署名者リストを掲げ、「その他の署名者」として五二名の名前をあげていてもそのなかにウィルソンをふくめているので、結局五三人目にあたる人物はだれなのか不明である。⁽³⁴⁾ カウリーは「五三名の作家、芸術家、作曲家」と書いているのに対して、ベルズは「五二人の知識人⁽³⁶⁾」と書いており、フィードラーは「五二名ないし五三名の作家⁽³⁷⁾」と書いている。五三名とかぞえているカウリーはドライサーもそのなかにふくまれていたと述べているが、アーロンの名簿にドライサーの名はない。以上のことからこの混乱には、ドライサーとLPGFとの微妙な関係がかかわっていると推定される。

ドライサーは、大統領選挙共産党候補フォスターおよびフォード支持を表明する独自の声明を早い時期（七月五日）に発表していた。⁽³⁸⁾これはLPGF設立の公開書簡（九月）や『文化と危機』の発行（十月）よりも早い。そのためドライサーは共産党候補支持声明を繰り返えして発表する羽目になり、そのことにいら立っていたようである。スワンバーグの伝記には、共産党オルグへのつぎのような手紙が引用されている。

私には貴方が「フォスターとフォードを支持する」声明を何故また欲するのか理解できません。私は貴方のためですでに一通書き、それを貴方は使ったし、今でも御手許におもちのはずです。その後私はエドマンド・ウィルソンやマルカム・カウリーと共同で二回目の声明を出しました。⁽³⁹⁾

ここで言及されている最初の声明とは七月五日に発表されたもののことと思われるが、二回目の声明とは公開書簡のことか、あるいはそれに連なるものであろう。あるいは「何故また欲するのか理解できません」といっている声明が、日付けから判断して公開書簡への賛同署名のことかもしれない。

ドライサーとLPGFとの関係は、彼がこの団体の正式メンバーであるかのごとくに自分の名前が無断で使用されているのに腹を立てたことによって、一層こじれた。彼は秘書につぎのような手紙を書かせている。

彼（ドライサー）は、この同盟が選挙後自動的に解散すること、そしてこの団体が事後に出現する何らかのより大規模な団体の核になり、彼が知らぬうちにその一員になるなどということにはならないと文書によって保証されることを条件にして、同盟員としてとどまることを了承します。⁽⁴⁰⁾

いずれにしてもこのような悶着のために、公開書簡署名者にドライサーが加わったかどうか、はっきりしないところがあり、そのために署名者数が五二名とかぞえられたり、五三名とかぞえられたりしたのであろう。

ところでこの年の大統領選挙の結果は、民主党ルーズヴェルトが現職のフーヴァーを大差で敗って当選、翌年一九三三年三月四日ルーズヴェルトが大統領に就任してニューディールが始まる。共産党候補フォスターは選挙運動中に心臓発作を起こし、運動期間の最終段階では公的場面に姿を見せず、やがて療養のためにモスクワへ行ってしまった。このためフォスターは政界の実際活動から引退したように見え、党指導権をブラウダーに完全に譲った形になった。大統領選挙における共産党の得票は、候補者欠場の事態にもかかわらず、二大政党制度のもとで少数政党の得票数がいつも厳密にかぞえられないので明確ではないが、一〇万票あまりにのぼり、共産党の得票数としては史上最大であった。しかし、このときノーマン・トーマスを候補に立てた社会党の得た八八万票にくらべても、共産党の得票は支持者をがっかりさせるのに十分なくらい少なかった。

大統領選挙にあたって共産党の掲げた政策は、「社会ファシズム論」や労農同盟論に立つ極左の方針であった。それに対して社会党は、一方にジョン・デューイなどのリベラルの加入にせめられる小ブル急進主義や「ミリタント」と呼ばれるトロツキスト系の新興勢力を擁し、他方に「オールドガード」と呼ばれる労組幹部を中心とする勢力がいて、両者の妥協の上に立つ現実主義的な不況打開政策を打ち出していた。だがリベラリズムの崩壊を意識した多数の急進的知識人の目には、社会党の現実主義がなまぬるいものと映り、共産党支持へ傾斜した有名文化人が増えたものと解釈される。

このような社会党と共産党との対照は、話を若干先取りして言えば、ニューディールが展開されるにつれ、その様

相を徐々に逆転していった。社会党はその改良主義的政策をニューディールに吸収される一方、トロツキスト系勢力に内部からつきあげられ、とくに一九三四年の特別党大会で「デトロイト宣言」により改良主義の否定、プロレタリア政権樹立を鮮明にした後は、大衆的支持を失って少数政党への転落の道をたどりはじめた。これに比して共産党は、コミンテルン第七回大会（一九三五）で人民戦線路線が採択されたことに典型的に示めされるように、反ファシズム民主主義擁護の路線をとってニューディールに接近していった。⁽⁴¹⁾

八、『アメリカン・スペクテーター』

大統領選挙運動がさかんにおこなわれているころ、ドライサーは新しい文学新聞の創刊のために精力を費やしていた。そしてこの新聞は『アメリカン・スペクテーター』という名で、大統領選挙の投票がおこなわれた一九三二年十一月に創刊にこぎつけた。

これは四ページからなる月刊新聞で、一部十セント、「人生全般について、とりわけ現代の具体的諸問題⁽⁴²⁾」について、諧謔をこめて論じる短文を掲載するという触れこみであった。編集陣には、実務担当者として当時一流の劇評家ジョージ・ネーサンと、アイルランド生まれの批評家アーネスト・ボイドが加わり、他にドライサーをはじめとしてジェームズ・ブランチ・キャベル、ユージン・オニールが入って、計五名からなる集団的編集体制を組んだ。編集原則は、一語一セント率の稿料で寄稿者から千五百語ないし二千語の文章を募り、五人の編集者の共同審査を通過したものだけを掲載するというものであった。広告を載せないかわりに原稿料は安かったが、その存在は数多くの有名作家の寄稿を獲得するのに十分なほど顕著で、大不況下の実験的出版として注目を引いた。

ドライサーと『アメリカン・スペクテーター』との関係は、例によってこみいったものであった。最初一九三二年五月に経営編集方針について大体の合意ができたにもかかわらず、ドライサーの留守中にネーサンとボイドが勝手に事をすすめ、しかもドライサーと絶交状態にあったシンクレア・ルイスを編集陣に加えることにしたと聞いて、ドライサーは怒りを爆発させた。創刊前の八月に、ドライサーは編集から手を引くと通告する手紙をネーサンに出しているが、そのなかで「この歳になるとさすがにさとりましたが、個人としての私のものの見方は他の人びとの見方とは容易に協調しません⁽⁴³⁾」と書き、自分が狷介な人間であると自覚していたことを告白しているのはおもしろい。

こういうやりとりのあぐくドライサーは編集陣にとどまり、ルイスは加わらなかった。だからドライサーの辞任通告は、彼の氣にくわないルイスを編集陣に入れないようにするための戦術であったにちがいない。ともあれドライサーは、キャベルやオニールがほとんど何もなかったのとは対照的に、この新聞のために大いに尽力した。みずから執筆したことはもちろん、多くの人びとに寄稿を訴えて、彼が望ましいと思った要素をこの新聞に注入すべく働いた。ルイスのかわりにアンダソンを編集者として招請したのもドライサーである。

ドライサーが『アメリカン・スペクテーター』の編集長であるかのごとく、まるでその船首像みたくに見えるようになったわけは、ネーサンやボイドがこの新聞の成功のためにドライサーの名声を欲したので、ドライサーの意見をかなり寛大にとりいれざるをえなかった結果であろう。だがそれだけでなく、ドライサー自身が最初からこの新聞を自分の目論見のために利用しようとして、かなり強引に引きまわした結果でもある。その目論見とは、この新聞を左翼知識人のための論壇に仕立てあげ、あわよくばこれを通じて知識人の結集をはかり、国民に対する政治的啓蒙運動を進めようというものである。

ドライサーは友人に『アメリカン・スペクテーター』への協力を訴えるときにこのような目論見も打ち明けたが、

『書簡集』からその例をいくつかあげよう。

この便箋のレターヘッドからおわかりのように、最近私は将来有望と思われる知的冒険に関係するようになりました。この刊行物の題字には「文学的新聞」とあります。こういう種類の副題が平均的な知識人にはたいいてい受けがよいので、私にはこの副題を残しておくことに何ら異存はありませんが、実際は私にいわせればこれは誤った名称です。この新聞は、私がそれと何らかのかかわりをもつかぎり、「文学的というよりも」⁽⁴⁴⁾はるかにもっと広い分野にわたり、人間的に重要なものです。

この新聞は右翼的なものではありません。⁽⁴⁵⁾

以前からいつも私の願いは、この新聞に社会批判の精髓を注入し、また大衆独裁の理念を普及するのに有効な議論を掲載させることでしたが、私はこれまでかなりの程度までそれに成功しました。これに価値があるのは、この新聞に掲載される社会批判や変革論が、知的にすぐれていても左翼の直截な議論によってはたやすく考えを変えない人びとに達するという点です。⁽⁴⁶⁾

ある種の知識人団体を結成し、それをひきいてアメリカ社会改革に乗り出したいという願望は、一九三〇年代に知識人による社会運動が起きるはるか以前、一九一〇年代からドライサーが抱いていた夢だったようである。たとえば一九一二年のある手紙からは、ドライサーがアメリカ・リアリスト・ギルド (the Guild of American Realists) な

る団体結成の構想を語っていたことが知れるし、一九一三年にはドライサーがフロイド・デルに宛てた手紙のなかで、ある出版社の顧問になるように要請されたことを伝え、この出版社を進歩的文化人のセンターにしうるかもしれないという期待を語っていた。⁽⁴⁸⁾『悲劇のアメリカ』を出版したころにはアメリカ国民均衡同盟 (the American League for National Equity) の結成を提唱したし、大統領選挙の前には知的労働者同盟の結成を助けようとしたことは前に述べたとおりである。『アメリカン・スペクテーター』にかけたドライサーの目論見がこれら一連の試みの延長上に位置づけられることはあきらかである。

しかし彼の目論見はまたもや実現しなかった。彼は『アメリカン・スペクテーター』の紙面に活気を与えるために大きな貢献をしたものの、彼自身があやぶんだとおり集団的編集体制のなかでうまく折り合っていけなくなり、とりわけネーサンやボイドとのあいだに衝突を繰り返しかえた。そして一九三三年十月七日付けの手紙で退陣の意志を表明した後、正式には一九三四年一月かぎりで編集からおりてしまった。⁽⁴⁹⁾

『アメリカン・スペクテーター』とドライサーとの関係において注目すべきもうひとつの特徴は、この新聞の性格上彼がここで発表した文章は評論仕立てになっており、しかもドライサーの著作のなかではめずらしい文芸評論、一種独特な私的文芸評論になっていることである。そのなかでも代表的なものは、「偉大なアメリカ小説」であろう。これは、ジョン・ウィリアム・デフォレストが一八六八年に発表してその後長く続いた論争のきっかけとなった同名の論文を受けとめ、現代において期待される「偉大なアメリカ小説」はリアリズム小説であると見定めた上で、アメリカにおけるリアリズムの歴史をドライサーなりの視点から描き出し、評価を加えたものである。

ドライサーの見方によれば、アメリカのリアリズムの創始者は標準的文学史でいわれるようにヘンリー・ジェームズ、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ、マーク・トウェンなどではなく、ヘンリー・B・フラリーということにな

り、ここでフラーは「アメリカ・リアリズムの父」と呼ばれている。この後にステイヴン・クレイン、ハムリン・ガーランド、フランク・ノリスそして『シスター・キャリー』を書いたドライサーと続くとしているのは、標準的な見方に合致するが、ハーヴェイ・ホワイットの『流砂』、ウィル・ベーンの『エヴァ物語』、ハロルド・フレデリックの『セロン・ウエアの墮落』、ブランド・ホイットロックの『第十三街区』など、今日ほとんど忘れられた作品をリアリズムの成果としてあげているのは特異な見方である。二十世紀初頭までに登場したこれらの作家たちは、当時のアメリカ批評界のビューリタンの、あるいはロマンティックな趣味のために無視され、忘却の淵に沈められるか、転向を余儀なくされたと述べられている。

興味深いのは、その後一九一〇年代から一九三〇年代初頭にいたる、いわゆるアメリカ・リアリズム時代について、ドライサーが三つの特徴を指摘している点である。

その第一の特徴としてドライサーがあげるのは、この時期に「偽リアリストの英雄たち」⁽⁵¹⁾が大勢登場して、リアリズムについての理解を混乱させたことである。その例としてあげられている作家のうち主なものは、リチャード・ハーディング・デーヴィス、ロバート・ヘリック、O・ヘンリー、ジャック・ロンドンなどである。これらの作家はリアリズムにロマンチックなものを混入させ、大衆に迎合したとして批判されている。

第二の特徴は、ジェームズ・ギボンズ・ハニカーとメンケンという二人の批評家がこの時期の批評界に君臨してリアリズムを励ましたことにあるが、ドライサーは彼らのリアリズムに対する見方や鑑識眼がまちがっていたので、彼らはむしろリアリズムの発展を阻害したというきびしい批判を提起している。

第三の特徴は、この時期に無数の作家がリアリストとして登場したが、右に述べた事情のため玉石混淆になっているということである。そのうち本物としてドライサーが高く買っているのは、シンクレア、ウィラ・キャザー、アン

ダソン、ルイス、デル、ドス・パソス、ヘミングウェイ、フォークナーの八名である。

このような文章からうかがえるのは、ドライサーが小説家としてたどってきた道を終着点にまで達したものである。この企図は、もっと本格的には『私自身の歴史』第三巻、第四巻において仕上げられたかもしれない。『私自身の歴史』はドライサーが早くから構想していた自伝であり、その第一巻、第二巻にあたるものは『夜明け』および『新聞記者時代』としてすでに刊行されていた。『私自身の歴史』は当初三巻で完結の予定だったが、一九一九年ごろから構想はふくらみ、四巻ないし五巻となるものと考えられるようになった。彼は一九三〇年代を通して第三巻『文学的野心』、ないし『文学修業時代』、および第四巻『作家としての経験』の執筆を何度も思い立ったが、それはついに書きおさえることができなかった。⁽⁵²⁾

一九三三年のドライサーは、自伝にとりかかる暇もなく『アメリカン・スペクテーター』に毎月のように執筆しており、この新聞への専心ぶりがよくわかる。ドライサーがその編集から辞した後には、『アメリカン・スペクテーター』の魅力が薄れ、やがて一九三七年には廃刊になった。

九、『人間という名のメカニズム』

ドライサーが『アメリカン・スペクテーター』紙の編集と執筆に力を注いでいた一九三三年は、世界の政治情勢が大きな変化をとげつつあった年であった。ドイツでは一月にヒトラーが首相になり、七月にはナチ以外の政党がすべて禁止されて、いよいよファシズムが完成した。日本は日中戦争に突入するとともに国際連盟を脱退した。こうして

世界は、すでに一九二二年に政權を掌握していたムソリーニ支配下のイタリアをふくめた日独伊三国のファシズムの脅威に直面することになった。この脅威は紆余曲折をたどりながらも、一九三六年日独防共協定締結、翌年イタリアもこの協定に参加して三国枢軸完成にいたるまで、次第に増大していく。

これに対する国際共産主義運動の闘争は正しい方針を見出せずに大きくおくれをとった。この結果共産主義者のあいだには、社会民主主義者や自由主義者を資本主義体制の危機を糊塗する悪質な「社会ファシスト」として断罪する一方、ファシストそのものは危機の必然的産物として当然視するという倒錯した態度が見られた。アメリカにおいても共産党は、ニューディールをはじめのうちは資本主義体制を救済するための改良主義としかみなさず、これにはげしい非難をあびせた。

その上ソ連党内におけるスターリンの肅清が拡大していくのにともない、各国共産党にもその波紋がおよんだ。アメリカ共産党もトロツキストとの抗争を激化させていった。これがひとつの頂点に達したのは、一九三四年二月オーストリアでファシズムが勝利し、社会民主主義者が弾圧された事件に対して、ニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデンで社会党が催した抗議集会に共産党員が大挙なぐりこみ、集会を流産させてしまった事件である。この集会はトロツキスト系も参加したので、共産党の目には社会ファシストとトロツキストとの野合とうつつたわけである。しかしその乱暴なやり方に対しては、当然多くの人びと、とりわけ知識人が反発した。それは『ニュー・マッセズ』三月号に、エドモンド・ウィルソン、ジョン・ドス・パススらによる『共産党への公開書簡』となってあらわれた。これは、共産党に接近する知識人が増えてきたそれまでの傾向から、逆に知識人の共産党離れが目立つようになる転換点とみなすことができる。

すでに述べたように、ドライサールの共産党離れはこれよりも早く、一九三二年から始まっていた。その後の手紙に

はアメリカでの共産主義運動の展望は暗く、望みがないという趣旨の言葉がたびたび見られる。にもかかわらずドライサラーは共産党支持そのものまで取り消したことは一度もなかった。興味深いのはスターリン粛清に対するドライサラーの態度である。一九三三年四月、マックス・イーストマンが、ロシアで迫害されている反スターリン派の人びとを救援しようという訴えにドライサラーも加わるように要請してきたのに対して、ドライサラーはつぎのように答えている。

とても重大な考察をせずに、ソ連政府という機械のなかにモンキー・レンチを投げこんでその働きを妨害するような真似をするつもりは、私にはありません。これ（「反スターリン派救援活動」）がその種のモンキー・レンチでないともかぎりませんから。⁽⁵³⁾

そして「考察」のあげくイーストマンにあらためて手紙を書き、要請をこたわったのだが、そのなかには第二次世界大戦への危惧を述べるつぎのような言葉も見られる。

現今の戦争の危機が、かりにそれがおさまる可能性が少しでもあるとして、実際におさまるので、また、日本の脅威が少なくともどの程度のものかはつきりするまでは、私はロシアの地位をいかなる意味でも揺がすようなことを一切したくないのです。⁽⁵⁴⁾

ファシズムが完成し、世界戦争の危険が現実的な脅威となるにつれ、資本主義か社会主義かということではなく、戦争か平和か、ファシズムか民主主義かということが焦点となったことはあきらかであった。このような情勢のなかで

ソ連は、いつ崩壊するかもしれない不安定な新興社会主義国の地位からのしあがり、大不況に悩む列強を尻目に着実に経済成長を上げて、世界政治に無視できない影響力をもつようになっていた。ソ連はルーズヴェルトのアメリカによって国家として承認され、国際連盟への加入を認められた。

共産主義運動の側も、一九三五年七月コミンテルン第七回大会においてこれまでの極左的路線を転換し、反ファシズム人民戦線の構築を目標に定めた。このような路線転換はコミンテルン第七回大会において突如おこなわれたものでなく、ヒトラーが政権を奪取した一九三三年以降事実上の路線修正が次第に個々の分野であらわれる。文学の分野では、ソ連において一九三二年ラップ（ロシア・プロレタリア作家協会）解散、一九三四年ソヴィエト作家同盟創設がその顕著なあらわれである。これは文学運動をプロレタリア文学とか革命文学のみに狭く限定する傾向から脱却しようとしたねらいにもとづいていたと見られる。これにともなう国際革命作家同盟（IURW）の存在意義も低くなり、その活動もおおのずから不活発になって、やがて一九三五年十二月には解散する。そのかわりに登場したのは、バリを拠点にした国際作家連盟（International Association of Writers）である。この団体は革命的立場を強調するよりも文化伝統を守ることに主眼をおいていた。この団体が召集する第一回文化擁護国際作家会議がバリで開催されたのは、コミンテルン第七回大会に先立つ一九三五年六月のことである。そのときドライサーはこの連盟の幹部会員に推挙されている。その後幹部会名簿から彼の名が落ちるが、そのいきさつの詳細は不明である。

ソヴィエト作家同盟や国際作家連盟の結成と平行したアメリカの動きは、アメリカ作家同盟（League of American Writers）設立にある。これは一九三五年四月第一回アメリカ作家会議（American Writers' Congress）において結成されたものであるが、このアメリカ作家会議開催もコミンテルン第七回大会以前のことである。ただしシュウォーツの研究によれば、これはむしろ古いハリコフ会議路線の延長上にあり、国際共産主義運動全体の路線修正と関係がな

かったとされる⁽⁵⁵⁾。しかしこのような文学運動組織の形態変更は、かならずしも共産党の公式路線の命じるところにしたがっておこなわれたのではないことが証明できたとしても(そしてこの証明がシュウオーツの研究のテーマである)、単に古い革命文学運動の延長にあるとだけではとらえきれず、情勢の変化に反応していわば自然発生的に反ファシズム文学運動への転換が生じたにとらえられるのではあるまいか。

いずれにしてもさまざまな方面で情勢の求めるところにしたがってとられてきた路線修正、プロレタリア革命路線から反ファシズム人民戦線路線への転換が積みかさねられた上に、コミンテルン第七回大会がそれまでの事実上の方針変更更に最終的承認を与えるという形で、この路線転換はなされていったのであろう。

共産党がこのような路線転換をなしとげつつあったころ、ドライサーは社会運動から遠ざかっていた。彼は共産党を相対化しはじめたところから、アメリカ国民にもっと受け入れられやすい改革運動を模索し、一九三三～四年ごろにはハワード・スコットの提唱したテクノクラシー運動に共鳴したり、一九三四年のカリフォルニア州知事選挙に立候補したアプトン・シンクレアのE P I C運動を支援したりした。しかしその後はしばらく政治にほとんど何も関与していない。

この時期ドライサーと社会運動との関係を困難にしたもうひとつの要因は、ドライサーのユダヤ人観である。ドイツ系カトリック教徒として幼時を送ったドライサーには、ユダヤ人への偏見が払拭されずに残っていた形跡があるが、このためヒトラーやファシズムの反ユダヤ主義に対する評価に甘さが生じた。だがこの種の無神経さは、ファシズムの危険、とりわけその人種主義の野蛮さが焦眉の問題になるにつれて、指弾されずにおかなかった。発端は、『アメリカン・スペクテーター』紙上、彼がその編集陣から退く前の一九三三年九月号に掲載された「編集会議」と題する座談会記事である。同種の記事は『アメリカン・スペクテーター』編集陣がときどき掲載していた。出席者は編集者

のネーサン、ボイド、キャベル、オニールにドライサーを加えた五名である。このときの座談会のテーマは「民族問題」であったが、もっぱらユダヤ人問題が論じられている。この座談会でもドライサーが編集長格らしく議論を主導し、発言の量も一番多い。

さてドライサーは最初につきのように問題を提起する。

「さてまずはじめに私は、世界中の人びとがユダヤ人とあらそうわけは、ユダヤ人が劣っているからというのではなく、すぐれているからであるという見方を提出します⁽⁵⁶⁾。」

これに続いて出席者はさまざまな角度から、あるときはふざけた調子で、ユダヤ人問題を論じる。ふざけた調子は『アメリカン・スペクテーター』の掲げた編集方針——つまりどんな深刻な問題も諧謔の精神であつかう——に見合ったつもりであろう。

議論を指導したドライサーの発言の趣旨は、ユダヤ人が特別優秀な人種であるということにあり、他の出席者はそれに反論してそんなことはない主張する。ドライサーは、有能なユダヤ人が各国に散在していると世界を支配することになるかもしれないから、それよりもユダヤ人に国土を与えて独自の国家を形成させたほうがよいと提案する。これはまさにシオニズムと同じ考え方である。そしてシオニズムは、その支持者がユダヤ人自身のなかにいかに大勢いようとも、反ユダヤ主義を裏側から補完し、反ユダヤ主義の一部をなすものといわなければならない。それはユダヤ人をやっつけろ、ユダヤ人を追い出せという攻撃と正面からたたかわず、非科学的な人種主義に非科学的な予言信仰で応じようとするものだからである。ドライサーの発言は、シオニズムを利用しようというイギリス帝国主義のね

らいを表現したバルファオ宣言の受け売りといわれてもしかたのないものである。

この座談会記事に対して反ユダヤ主義糾弾の告発をしたのはハッチンス・ハップグッドであった。彼は記事が掲載された翌月に『アメリカン・スベクターター』編集部宛ての手紙を書いたが、これに反論の手紙を書いたのはドライサーで、二人のあいだに手紙の往復が二回あった。⁽⁴⁷⁾この往復書簡は、一年以上たった一九三五年四月『ネーション』紙上に、ハップグッドの執筆した「ドライサーは反ユダヤ主義者か」⁽⁴⁸⁾という評論のなかで発表された。発表がこの時点までおくれた理由は、ナチによるユダヤ人迫害がますますひどくなってきたのであらためて問題になったという情勢の変化のほかに、『アメリカン・スベクターター年鑑』が一九三四年末に出版され、その巻末にこの座談会記事が収録されていたという事情が介在しているかもしれない。

ハップグッドによる暴露はドライサーのスキヤンダルとして大きな反響をよんだ。ゴールドは、「ドライサー、その銃には実弾がこめられているぞ」⁽⁴⁹⁾と題するエッセーを『ニュー・マッセズ』に発表してドライサーをたしなめた。ドライサーも『ニュー・マッセズ』に「ドライサーは反ユダヤ主義者ではない」⁽⁵⁰⁾を発表して弁明に努めたが、座談会における彼の発言が情勢をわきまえない無神経なものであったことはあきらかである。ただしこの点では座談会の他の出席者も、ユダヤ人を嘲笑し、偏見をあらわした発言をしており、ドライサー以上にとがめられるはずであった。この件をめぐるドライサー評価については、ケネルのつぎのような見方が妥当であろう。

マイク・ゴールドもハッチンス・ハップグッドも、この弁明（ドライサーが『ニュー・マッセズ』に発表した声明）で納得するわけにはいかなかったけれども、同じ結論に達した。すなわち二人とも、ドライサーは考えがいをしているだけで悪意はないのだと信じた。ドライサーの親友のなかには反ユダヤ主義者のユダヤ人が何人かいた。

左翼からきびしくたたかれたことで彼が当座の態度を硬化させたのはまちがいないし、その上に我を張って少々理屈に合わないことをいった⁽⁶¹⁾。

このエピソードはドライサーを社会運動からさらに遠ざけるのに役立ったであろう。ともかく彼はこの後一九三五年から三七年まで、科学や哲学の探究に没頭するようになった。そのために彼は天文学、物理学、生物学、生理学などに関する多数の書物を読み、科学研究施設を訪れ、科学者たちに直接面会質問して、膨大な断片を書きためた。人生と宇宙の本質を解明する理論体系を打ち立てようとしていたのである。それは書きあらわされて大きな本になる予定であった。ドライサーはこの本の構想についていろいろなところで語り、書きのこしているが、その題名もはつきりきまっていず、いろいろな案を考えていたらしい。そのなかで『人間という名のメカニズム』というタイトルがもっとも有力だったようであるが、この本は結局完成にほど近い状態で放棄され、ドライサー死後他人の手によって編集されて世に出たときは、『人生についての覚え書き』という題になった⁽⁶²⁾。

『人間という名のメカニズム』がどのような本になるはずであったか、もはやだれにもわからない。ドライサー自身にもついにその最終的な形を思い描けなかったからこそ、未完におわったにちがいない。『人生についての覚え書き』の編者たちも、ドライサーが書いたはずの本を復元するなどというだいたいそれだ主張はせず、残された断片を整理しただけにとどめている。このような状態のなかでドライサーがこのころ考えていた哲学の基本構図を知るには、『個性の神話』と『汝、幻よ』の二つのエッセーが好適である。

この二つのエッセーでドライサーは、個人主義とか個性とかのリベラルなアメリカ的価値の虚妄性を徹底的に暴露し、攻撃した上で、人間や宇宙についての機械論的な見方を主張する。それは『ハーランの坑夫たちは語る』の「序

論」におけるアメリカの個人主義が破綻したとする議論を一層つきつめ、宇宙論の水準まで高めたものといってもよいであろう。ここから出てくる社会理論上の帰結は、個人の繁栄や福祉を重視するのではなく、種としての人類全体の繁栄を重視する立場であり、個人の行為よりも集団や組織の歴史的営為に注目する立場である。また、これが一層つきつめられると、社会理論というよりも宇宙論に接近し、この視野のもとで重要になってくるのは人類全体ですらなく宇宙全体の繁栄なのであり、繁栄などという価値判断をふくむ表現ではあたらない、むしろその無窮の持続である。だが他方では、視野を無限に広げるにつれて次第に現実の具体的な局面に対する無関心が目立ってくる。この無関心はこの時期のドライサーに特徴的なものである。

たとえば「個人の神話」では次のような言葉に出会う。

個人がいわゆる単位として存在しうるのは、人類のような群団の一小部分としてのみである。人類がなければ個人もない。生きているのは個人ではなくて人類や諸人種であり、そういう群団の創造的^{グレイズ}化学反応体である。個人はみずから生きているのではなく、自己発現をするためにその個人のみならず彼に似た数十億もの人間を必要としている何ものかによって生かされている。その何ものかが何であるのかは、人間個人が見出したためしはない。それゆえにいわゆる個人に個性などはひとかけらもない。⁽⁶⁾

さらに「汝、幻よ」にはつぎのような表現が見られる。

私の考えでは、偉大な創造的エネルギーがわれわれの目にする無数の形あるものすべてのなかにみずからを開示

し、そこから息吹きを伝えてくるように思われる。森羅万象の作用や反作用は創造的エネルギーの性質にすぎず、事物そのものにそなわっているものではない——しかしこれら一切の作用がまとまって何かもっと大きな意味で（おそらく）普遍的思考とか普遍的存在とかいうべきものの要件になっている。まさかというであらうか。だが一切があるひとつの目的にかなっているのだ。すなわち、全体をなす何ものかが、人生の意味をあきらかにするやり方であれ、無意味と思わせるやり方であれ、みずからを表現したいという、はげしく重大な欲求や気分であれ、いたずらなとるにたらぬ欲求や気分であれ、その表現形式になるという目的に。⁶⁴

これらの文章からドライサーの世界観を要約して述べれば、宇宙には「自然の創造的諸力」⁶⁵が横溢しており、これが森羅万象に浸透して一切の事物の運動や作用の根本的な原因となっているという見方である。この「自然の創造的諸力」の正体については不可知なものとみなすのがドライサーのたてまえ上の立場であるが、「普遍的思考とか普遍的存在」とか呼んだり、「何ものか」と呼んだりして神という名を使うまいと苦心しているものの、結局は疑人化しうる神的存在であることをししぶ認めている。ただこの神的存在に道徳的な窮極善はなく、宇宙の運動すべてがこの神的存在の気まぐれな自己表現と解釈される。換言すればドライサーの世界像は、超絶主義者エマソンのいわゆる「大^{グレート}霊」に似たものによってみたされた汎神論的世界でありながら、大霊の善性を欠き、ヘーゲルの絶対精神の自己実現にいたる過程として理解された世界像に似通いつつも、この自己実現には止揚を重ねて上昇していくというような方向性が欠けている。ドライサーにとって大事なことは、人間にはかりきれない自然の力の正体をつきとめることではなく、この力にくらべれば人間とりわけ個人がいかに無力で矮小なものかということとをさることである。そのあげく、一切の個人的野心を捨て、むしろこの「幻」のような力に身をゆだねよと、暗黙のうちに説教する神

秘主義に傾斜する。

『人間という名のメカニズム』は、このような世界観を科学的に論証しようという、最初から手にあまるような課題の解決をめざしたもので、ドライサラーもこれを書きあげるのとは不可能であることをやがてとったにちがいない。彼の憂鬱は深まり、一九三七年はほとんど年間を通じて病気に悩まされ、ほとんど何もできなかった。

十、スペイン戦争

コミンテルンが採択した人民戦線戦術は、その後スペインでは一九三六年二月の総選挙で、フランスでは五月の総選挙で成功をおさめ、その有効性を実証したように思われた。アメリカでも共産党は、ルーズヴェルト政府をアメリカ型人民戦線政府に転化しうるものと見立て、ニューディールに部分的批判を加えつつも全体としては支持協力するようになった。その結果、それまで孤立していた共産党が国民各層や生活各分野に浸透していった。ニューディールのなかでもユニークな政策であった連邦作家計画 (Federal Writers Project) は共産党の文化運動に後押しされたものだし、政府中枢部にすら党の影響力がおよんだ。労働運動においても、ワグナー法下急速に進展した組織化において活躍した共産党系オルグは信望を高めた。にもかかわらず共産党の政治勢力としての伸長は、国民生活全般に占める党の影響力に見合ったものではなかった。党勢は依然として大部分がニューヨーク市に集中し、あとはシカゴと西海岸に一定の勢力を築いてはいたものの、米国内の大部分の地域はほとんど空白のままであった。党員の獲得にはまだまだ消極的で、特に労働運動において、非党員にとどまっている活動家の方が動きやすいという理由から、わざと党員にしないという傾向すらあったことが指摘されている。

他方世界中でファシズムの攻勢が強まったが、合衆国にもファシシヨ的な運動が抬頭してきた。ヒューイ・ロングの「富の分配」協会や、チャールズ・コフリンの全米社会正義同盟 (National Union for Social Justice)、タウンゼンドの養老年金要求運動などはファシシヨ的なデマゴギーにもとづいていたが、これらが牧師ジェラルド・スミスの仲介により糾合されてユニオン党 (Union Party) となり、ウィリアム・レムケを大統領候補におしたてると、ファシズム運動の色彩を帯びてきた。このほかKKK団などの極右テロ団体や、独伊ファシズムに追隨する真正のファシズム団体の暗躍も活発になった。

このような情勢の下、一九三六年のルーズヴェルト二期目の大統領選挙は、ファシズムかニューディール続行かという対立をめぐるものとなった。このとき共産党には、反ファシズム統一戦線の路線にしたがい、ルーズヴェルト支持へ動く用意があった。だが当時ニューディールとルーズヴェルトはアカ攻撃にさらされており、その当選のためにはこのアカ攻撃をかわす必要が感じられたので、共産党はブラウダーを独自候補に立てて大統領選に出馬することになった。ルーズヴェルトへのアカ攻撃を自分たちの方へそらすことによって少しでも軽減しようというねらいである。ドライサーはこのときも共産党からブラウダー支持を求められたが、承諾しなかった。ニューディールを国内改革のための有効な政策とみなし、これとまだ現実政治に影響をおよぼしえない共産党とを比較した上で、ルーズヴェルトを選択したのである。これは結局は共産党の人民戦線路線に合致する選択であったといえよう。

ルーズヴェルト大統領の二期目は、第二次世界大戦前夜、世界の情勢が目まぐるしく変化する激動期に重なる。一九三六年七月に勃発したスペイン戦争が長期化するなか、全面戦争の危険が高まるヨーロッパに対してアメリカでは孤立主義の風潮が強くなった。ルーズヴェルトの外交政策は中立を基本としていたが、一九三五年に制定された中立法は、一九三七年にはスペイン内戦不干渉をねらいとして一層きびしいものへ改正された。

孤立主義のもうひとつのあらわれは非米活動調査委員会 (House Committee on Un-American Activities) の設置である。これは米国内のファシズム運動を旧世界からの干渉ととらえ、これを非米的なものと問題視して取り締まろうという目的で、一九三八年五月に発足した。だが、よく知られているとおり、この機関はやがてファシズムよりもむしろ共産主義にねらいをつけ、特に戦後悪名をはせることになる。ドライサラーは非米活動調査委員会を言論の自由を奪うものとしてはげしく非難した。一九四〇年九月にはこの委員会を批判する『エディター・アンド・パブリッシャー』というブロードサイドを発表している。⁽⁶⁶⁾ドライサラー自身も非米活動調査委員会の調査を受けた。マーチン・ダイス委員長に派遣されて尋問のために訪れた調査官とのやりとりを手紙で伝えるドライサラーは、意気軒昂である。

いうまでもなくこの男は私の最悪の言葉、あるいは最良の言葉というべきかもしれませんが、とにかく私のはげしい言葉にまくしたてられ、帰っていきまし——逃げ出せてホッとしただろうと思います。私はこの男に、どうかダイス氏にお願いして氏の委員会への出頭命令を出していただくよう伝えてくれと行ってやりましたが、何の呼び出しもかかってきません。⁽⁶⁷⁾

非米活動調査委員会の共産党に対する脅威はただならぬものであった。そのもっとも無惨な結果は戦後にあらわたのであるが、戦前においても十分猛威をふるった。共産党の方にはこの弾圧に抗してたたかいぬくことのできないう弱さがあった。共産党が非米的であるという主張の大きな根拠となったのは、各国共産党がコミンテルン支部であり、コミンテルンの指令によって動くこととされたことだったので、合衆国共産党は一九四〇年にコミンテルンとの関係を絶った。これは合衆国共産党がコミンテルン解散以前にコミンテルンの終焉を見通していたようにも見えるが、

実際は事前にコミンテルンの了承をとりつけてあったし、実際上の必要は弾圧をかわすことにあったのである。

一九三〇年代後半においてコミニズムとファシズムが正面からぶつかった最大のたたかいは、スペイン戦争であった。ドライサーはこのスペイン戦争とかかわることによって目ざめたかのように、ふたたび政治や社会運動に活発に参加するようになる。

ドライサーがスペイン戦争に具体的に関与するようになったのは、一九三八年、戦争が膠着状態に入ってスペイン人民戦線政府が物資欠乏に苦しみはじめたところである。この年バリの国際作家連盟は、七月に第二回国際作家会議を召集し、それを世界平和大会に結びつける計画を発表した。この計画は、一般的にはファシズムによる世界制覇の危険に警鐘を鳴らして進歩的文化人に反ファシズム闘争に立ちあがるように呼びかけることを目的にしていたが、より具体的にはスペイン人民戦線支援をねらっていた。国際作家連盟からの招請状は、アメリカにおける連盟の支部ともいふべきアメリカ作家同盟に届いたが、アメリカ作家同盟はドライサーに出席を要請した。ドライサーはこの要請に応じてバリへ急行したが、バレンシア、マドリッド、バルセロナで開催された会議には間に合わなかった。それでもドライサーはバリで演説した後、独自にバルセロナに行き、共和国政府軍の窮状を直接視察した。衝撃を受けたドライサーは、帰国後何とかスペイン救済のために尽力したいと考え、いろいろな方面に精力的に働きかけはじめた。

しかしすでに述べたように合衆国は厳格な中立法をしき、スペイン内戦へのいかなる干渉も禁止していたので、ドライサーの苦労は容易にむくわれなかった。彼は、中立法に違反しないように政府軍、反乱軍双方に食糧や医療品などを送るための委員会を組織しようと考え、いろいろな分野の有力者に呼びかけるとともに、ルーズヴェルト大統領にも協力を要請して会議を申し入れた。大統領はこの申し入れに応じて、その結果ハドソン河上のヨットでドライサーとルーズヴェルトとの昼食を囲んでの会談が実現した。この会合で二人は意気投合したが、スペイン救済計画への

協力についてはルーズヴェルトも踏み切れなかった。

スペイン救済委員会結成のためにドライサーは多くの有力者と会談したり、手紙のやりとりをしたが、このときもとても協力的だったのはクエーカーの指導者ルーファス・ジョーンズであった。ドライサーはこの人物に強く引かれ、尊敬を抱くようになるとともに、以前から関心をもっていたクエーカーの運動に一層共感を覚えるようになった。そのおかげでドライサーは、クエーカー教徒を描いて書きかけたまま長年放置してあった小説『とりで』を完成させようという意欲を与えられた。それはスペイン救済のために骨を折った結果の思いがけぬ副産物ともいえる。

ドライサーのスペイン救済計画は結局挫折したが、その後ルーズヴェルト自身が救済に乗り出し、一九三八年十二月にはスペインに食糧を送ることに成功した。それはドライサーの働きかけが間接的にせよ功を奏したものといえよう。ともあれこのルーズヴェルトの行動はドライサーからの賛辞をかちえた⁽⁶⁸⁾。しかし形勢は共和政府に利あらず、一九三九年三月フランコ軍事独裁が凱歌をあげた。これが大戦前夜のもうひとつの不吉な前兆であることはまちがいないかった。

十一、『アメリカは救うにあたいます』

大戦前夜の不吉な前兆としてスペイン人民戦線政府の倒壊もその影にかくれてしまうような大事件は、ミュンヘン協定であった。一九三八年ヒトラーが露骨にもチェコをドイツ領土に併合したのに対し、英仏首相が独伊首相とミュンヘンで会談して、ズデーデンのドイツ併合に承認を与えたというできごとである。当時の世界政治ではパワー・ポリティックスの論理が堂々とまかりとおり、大国間の取り引きで小国の権利がないがしろにされることはめずらしく

なかった。この場合大国とはまず第一に英国のことであった。第二次大戦後に二超大国となる米ソの影響力はまだ弱かった。米国は経済力はともあれ、孤立主義のために国際連盟にも加入していず、ヨーロッパのことについて発言権がなかった。ソ連は急速に発展しつつあったとはいえ、世界政治への決定的影響力をもつのはまだ先のことである。

世界を指導する最強国たるイギリスは、一九三四年以来ヒトラーに対していわゆる宥和政策をとりつづけた。その基調は根深い反共主義に貫かれていて、何とかドイツの矛先をソ連へ向けさせようというものである。当時ヨーロッパ特派員としてスイスにいた笹本駿二は、つぎのように書いている。

実際、ミュンヘン協定後のヨーロッパでは、ヒトラーの鋒さがウクライナに向うだろうというのが、一番ありそうなことだと広く信じられていた。それは「スターリンよりはヒトラーの方がましだ」という、西欧の中産階級以上の階層に広がっていた根強い反共思想に根ざすものだった。ミュンヘンの妥協を肯定したヨーロッパ人の大多数は、これを暗黙のうちに諒解していたのである。⁽⁶⁹⁾

このようなパワー・ポリティックスにはパワー・ポリティックスの論理で応じるほかはないというのが、スターリンの考え方だったと思われる。笹本はつぎのように分析している。

スターリンとしては、この危険な可能性にどう対処するかが最大の課題となってきたのである。つまり、じっとしておれば、段々と近づいてくるヒトラーの鋒さき（中略）をどうしてかわすか、これが日夜スターリンの脳裏から離れぬ悪魔のようなものとなってきた。結局スターリンが下した決断は「独ソ接近」の道だった。⁽⁷⁰⁾

こうして一九三九年八月独ソ不可侵条約が締結された。これでドイツはソ連との正面衝突をさしあたり回避した上で、英仏と同盟関係にあったポーランドに侵攻した。こうなるとさすがに英仏も宣戦布告を出さざるをえず、ついに第二次大戦が始まることになったのである。

独ソ不可侵条約はヒトラーが対英仏戦争を開始するのを助けたのであり、その点でスターリンの戦争責任を問う根拠とされる。このときのスターリンの決断を糾弾する共產主義者のひとりは不破哲三である。彼はこう述べている。

ソ連のこうした外交的転換は、たとえその根底に将来のドイツ戦にそなえての戦術的な思惑があったとしても、コミンテルン第七回大会の方針にもとづいて反ファシズム戦線の発達に全力をあげていた各国の共産党を、非常な政治的苦境に立たせるものでした。／＼ところがスターリンは、ことをソ連の外交上の転換にとどめようとはせず、コミンテルンをつうじて、各国の共産党が新しい外交政策を支持し、これを自分たちの行動の新しい基準とすることを要求しました（中略）スターリンを中心にしたソ連の指導部は、コミンテルンという国際組織の民主的ルールも無視して、これをソ連の外交政策の執行の道具に変えてしまったのでした。⁽⁷⁾

このような批判は、独ソ不可侵条約の報に接したアメリカの知識人の多くが衝撃を受けて動揺したことを正当化するであろう。実際これを機に、それまで反ファシズム運動に協力的だった進歩的知識人の多くが共産党に幻滅し、戦列を離れていった。

ところがドライサラーは、しばらく離れていた共産党路線にこのころからむしろ復帰した。新聞雑誌に政論を発表す

るとともに、助手にかなり頼ったとはいえ、『アメリカは救うにあたいする』という大きな著書を出すほどであった。『アメリカは救うにあたいする』は、英独間の戦争が膠着状態にあったときに書かれた米国中立政策擁護論である。この本のなかでドライサーは英独戦争が帝国主義戦争であるとみなし、とくにイギリスが反ファシズムのためにたかっているという見方を批判している。帝国主義国家として世界を支配し、君主制のもとに国民をしいたげているイギリスの現実をこまかに指摘し、米国内の一部にあるイギリスへの同情論に反論している。そしてさらにイギリスと同盟を組もうとしている国内勢力の偽善を暴露することにも力を注ぐ。反ファシズム陣営として英米同盟を描き出すとする企てに反対し、その民主主義陣営とされる国々の実態が金権寡頭政治であると指弾している。このような議論は、独ソ不可侵条約後「戦争を双方の側からの帝国主義戦争と規定したが、やはりもっと多くの告発がイギリス、フランスなどの『民主主義擁護の欺まん』をあばくことに向けられていた」と不破によって指摘される、コミンテルンの論調にそっくりであった。⁽⁷²⁾

しかし『アメリカは救うにあたいする』には、独ソ不可侵条約以前の人民戦線路線の残響もはっきり聞き取れ、そこにまた時代の産物としての刻印が見出されるのである。たとえばこの本の結末近くの一節を引用してみる。

連邦憲法をそなえたアメリカこそ、民主主義を成長発展させるために立脚すべき拠点である。外国でおこなわれているこの大流血に加わらずに、むしろわが国の模範を通じて民主主義がいかに機能しうるかということを世界にしめすことによって、アメリカと民主主義を救おうではないか。⁽⁷³⁾

ここには独立宣言や連邦憲法をアメリカの民主的伝統の誇るべき遺産と評価し、マルクスやレーニンの肖像となら

んでワシントンやリンカンの肖像が集会などで飾られた、アメリカの人民戦線路線から引き継がれた修辭が見られる。それは「共産主義は二十世紀のアメリカニズム (Communism is the 20th century Americanism)」と、こうスローガンを提起したブラウダーを介して、孤立主義的な愛国主義をふくむアメリカニズムにも通じる。

興味深いことにこの本は、もともとアメリカ市民権を得ようとしていたオスカー・ピーストという移民が、アメリカの愛国者であることの証明にアメリカニズムの本の出版者になりたいと考えていたところへ、ドライサーが便乗することによって書かれることになったものである。だが書きあがった本を読むと、それはアメリカ礼讃というよりは共産主義者の立場からの中立政策論であって、むしろ非米活動調査委員会が目の仇にするようなものだったので、ピーストは出版にしりごみせざるをえなかった。そのためドライサーの本ではいつもそうであるように、この本も実際に出版にこぎつけるまでにはさんざん悶着をひきおこした。

しかしドライサーは、『アメリカは救うにあたいする』で論じた米国中立論を長くは主張しつづけられなかった。一九四一年六月、西部戦線の膠着に業を煮やしたヒトラーがソ連への侵攻を開始すると同時に、コミンテルンはふたたびナチスを世界人民の敵と宣言し、アメリカにも反ファシズム統一戦線に参加する立場から参戦するように求めた。この段階で『アメリカは救うにあたいする』は、ドライサー自身にとっても時代おくれのものとなり、出版後わずか六ヶ月もしないうちにほとんど見向きもされなくなった。ソ連がナチスによって壊滅させられる前にアメリカは参戦するべきだという共産党の主張に、ドライサーが同調したことはいうまでもない。しかしついに真珠湾攻撃によって日米開戦となり、アメリカが参戦したときには、一九三〇年代はとくに終っていた。ドライサーも七十歳、政治活動を続ける体力も氣力もうあまり残っていなかった。

おわりに

ドライサーの一九三〇年代は、錯誤と挫折の連続だったといってもいいすぎにはならないであろう。この期間彼がつぎつぎに立てた企てで首尾よく成就したものはほとんどない。彼は情勢判断や見通しを誤まって醜態を演じ、妙な思いこみから妄想をたくましくした。しかし、このような激動の時代に深くかわって生きながら、過誤を免れた者がいようか。ドライサーが社会に関与しようとしたことを嗤うわけにはいかない。むしろその真摯な姿勢により、時代のなかでたしかに生きたと感じる瞬間が彼に幾度か訪れたのではないだろうか。

ドライサーが時代に密着して生きようとしたことにより、彼の行跡をたどることは、とりもなおさずこの時代の歴史をとらえかえす作業を巻きこむ。ドライサーの一九三〇年代についての研究は、一九三〇年代研究全体の重要な構成部分となりうる。そして一九三〇年代は二十世紀の歴史全体を理解するための鍵となる時代であろう。

他方ドライサーの一九三〇年代は、作家としての彼の業績に、決定的に重要なものを何も付け加えなかったかもしれない。この時期の彼の著作のなかで見るべきものは、創作よりもむしろ雑誌などに発表した評論的文章に多い。だがもっと重要なことは、この時代の後に発表された『とりで』などの小説作品の解釈評価はいうまでもなく、それ以前の彼の文学的な全業績の意義も、彼の一九三〇年代の言動を視野に入れることなしには全面的に把握できないということである。

本稿が以上の課題に少しでも接近しえたことを祈りつつ、ここで筆をおく。

注

- (一) Theodore Dreiser to H. L. Mencken, Aug. 9, 1936, *Letters of Theodore Dreiser. A Selection*, 3 vols, ed. Robert H. Elias (University of Pennsylvania Press, 1959), p. 778. 三十一頁『標題集』に *Letters* の註記がある。#22 トーマーの平假名 TD の註記がある。#27 本稿中の四三三頁の注に TD の注記がある。#28 註記がある。
- (二) Sherwood Anderson to TD, Jan. 12, 1936, *ibid.*, p. 768.
- (三) TD to Anderson, Jan. 28, 1936, *ibid.*, p. 769.
- (四) W. A. Swanberg, *Dreiser* (Charles Scribner's Sons, 1965), p. 376.
- (五) *Ibid.*, p. 377.
- (六) Borden Deal, *The Tobacco Men* (Holt, 1965). A novel based on notes and a screenplay by TD and Hy Kraft.
- (七) 著者ロバート・トーマーの著した小説の題名は『Theodore Dreiser: A Primary and Secondary Bibliography』, eds. Donald Pizer, Richard W. Dowell, Frederic E. Rusch (G. K. Hall & Co., 1975) 468頁に記されている。
- 。"The Best Motion Picture Interview Ever Written," *Photoplay*, 34 (Aug.), 1928.
- 。"Dreiser on Hollywood," *New Masses*, 4 (Jan.), 1929.
- 。"Comments on Film Arts Guild," *W. 8 Street Film Guild Cinema...Inaugural Program*, 1. Feb., 1929.
- 。"Theodore Dreiser Says," *W. 8 Street Film Guild Cinema...Fifteenth Program, June 20th to July 5th*, 1929.
- 。"Dreiser Warns Films on 'American Tragedy,'" *New York Times*, Jul. 8, 1931.
- 。"Theodore Dreiser Picks the Six Worst Pictures of the Year," *New Movie Magazine*, 5. (Jan.) 1932.
- 。"A Statement by Theodore Dreiser," *Experimental Cinema*, no. 4 (May), 1932.
- 。"The Real Sins of Hollywood," *Liberty*, 9 (Jun. 11), 1932.
- 。"Myself and the Movie," *Esquire*, 20 (Jul.), 1943.
- (八) TD to Ruth Epperson Kennell, May (?) 1938, quoted in Ruth Epperson Kennell, *Theodore Dreiser and the Soviet Union, 1927—1945: A First-hand Chronicle* (International Publishers, 1969), pp. 257-8.
- (九) TD to Sergei Dinamov, Jan. 5, 1927. *Letters*, p. 450.

- (10) 村山淳彦「ドレイサーの旅行記」『ワルブルギス七十七』(国学院大学外国語研究室、一九七七)参照。
- (11) TD, "Theodore Dreiser on the Elections," *New Masses*, 4, (Nov.), 1928.
- (12) Michael Gold, "The Dreiser I Knew," *The Mike Gold Reader, from the writings of Michael Gold* (International Publishers, 1954), p. 159.
- (13) *Cf. Letters*, p. 471, p. 473, etc.
- (14) ノーランド・ヤリスは「ハリコソ革命作家会議」(ハリコソ会議に出席したアメリカ代表団連名による総括文書)「安宇植ほか編著『資本・世界へのロベッタリナ文学運動』第四卷(三一書房、一九七三)」、三〇四頁。
- (15) TD, *Tragic America* (Horace Liveright, 1931), p. 410.
- (16) *Ibid.*, 412.
- (17) Lawrence H. Schwartz, *Marxism and Culture: The CPUSA and Aesthetics in the 1930s* (National University Publications, 1980), pp. 42-3.
- (18) Malcolm Cowley, *The Dream of the Golden Mountains, Remembering the 1930s* (Penguin Books, 1981), p. 55.
- (19) *Ibid.*, p. 58.
- (20) John Reed, *Ten Days That Shook The World* (International Publishers, 1971), p. 234.
- (21) Charles P. Roland, "The South, America's Will-o'-the-Wisp Eden," *Myth and Southern History. The New South*, ed. Patrick Gerster and Nicholas Cords (Rand McNally College Publishing Co., 1974), p. 193.
- (22) TD, "Introduction," National Committee for the Defense of Political Prisoners, *Harlan Miners Speak: Report on Terrorism in the Kentucky Coal Fields* (Da Capo Press, 1970), pp. 15-6.
- (23) Cowley, *op. cit.*, p. 70.
- (24) Edmund Wilson, *The Thirties, From Notebooks and Diaries of the Period*, ed. Leon Edel (Farrar, Straus and Giroux, 1980), p. 153.
- (25) W・N・フォスター著「合衆国共産党史刊行委員会訳『アメリカ合衆国共産党史』」(大月書店、一九六八)、四四九頁。

- (26) *Highlights of a Fighting History: 60 Years of the Communist Party, USA*, ed. Philip Bart, et al. (International Publishers, 1979)
- (27) Cowley, *op. cit.*, pp. 116-7.
- (28) フォスター、前掲書、四一一頁。
- (29) ゲオルグ・ルカーチ、藤本淳雄訳「批判的リアリズムの現代における意義」、『ルカーチ著作集2』（白水社、一九六八）、一六七頁。
- (30) TD to Dallas McKown, Jun. 9, 1932, *Letters*, pp. 586-8.
- (31) *Ibid.*, p. 586.
- (32) Wilson, *op. cit.*, p. 206.
- (33) Schwartz, *op. cit.*, p. 43.
- (34) Daniel Aaron, *Writers on the Left* (Avon Books, 1969), p. 213, p. 437.
- (35) Cowley, *op. cit.*, p. 112.
- (36) Richard H. Pells, *Radical Visions & American Dreams. Culture and Social Thought in the Depression Years* (Harper & Row, Publishers, 1974), p. 77.
- (37) Leslie A. Fiedler, "The Two Memories: Reflections on Writers and Writing in the Thirties," *The Thirties. A Reconsideration in the Light of the American Political Tradition*, ed. Morton J. Frisch and Martin Diamond (Northern Illinois University Press, 1968), p. 55, p. 57.
- (38) Richard Lehan, *Theodore Dreiser: His World and His Novels* (Southern Illinois University Press, 1969), p. 178.
- (39) TD to Joseph Pass, Aug. 17, 1932, quoted in Swanberg, *op. cit.*, p. 399.
- (40) TD's secretary to Pass, Oct. 14, 1932, quoted in *loc. cit.*
- (41) 新川健三郎『リネーティーン』（近藤出版社、一九七三）、四二一―五二頁参照。
- (42) "Foreword," *The American Spectator Year Book*, ed. George Jean Nathan, Ernest Boyd, Theodore Dreiser, Sher-

wood Anderson, James Branch Cabell, Eugene O'Neill (Frederick A. Stokes Co., 1934), p. xii.

- (43) TD to George Jean Nathan, Aug. 7, 1932, *Letters*, p. 598.
- (44) TD to Howard Scott, Sept. 17, 1932, *ibid.*, p. 602.
- (45) TD to Evelyn Scott, Oct. 28, 1932, *ibid.*, p. 615.
- (46) TD to John Dos Passos, Jun. 14, 1933, *ibid.*, p. 631.
- (47) Margery Dell to TD, 1912 (?), unpublished, Dreiser Collection, Box 211, University of Pennsylvania Library.
- (48) TD to Floyd Dell, Mar. 23, 1913, unpublished, Box 211.
- (49) この間の事情をよむ『アメリカン・スペクテイター』そのものがいつては「大橋吉之輔『アメリカン・スペクテイター』とシヤーマン・ヘンダマン」(大橋健三訳『大橋吉之輔全集刊行委員会編『文学とアメリカⅢ』南雲堂、一九八〇)に詳しう記述されている。
- (50) John William DeForest, "The Great American Novel," *The Nation*, vol. 6, Jan. 9, 1868.
- (51) TD, "The Great American Novel," *The American Spectator Year Book*, p. 20.
- (52) *Cf. Letters*, p. 172, p. 354, p. 359, etc.
- (53) TD to Max Eastman, Apr. 26, 1933, *Letters*, p. 629.
- (54) TD to Eastman, May 26, 1933, *ibid.*, p. 630.
- (55) Schwartz, *op. cit.*, p. 46.
- (56) "Editorial Conference," *The American Spectator Year Book*, p. 346.
- (57) Hutchins Hapgood to the editors of *The American Spectator*, Oct. 4, 1933; TD to Hapgood, Oct. 10, 1933; Hapgood to TD, Oct. 18, 1933; TD to Hapgood, Dec. 28, 1933; *Letters*, pp. 648-53, pp. 657-64.
- (58) Hapgood, "Is Dreiser Anti-Semitic?" *The Nation*, CXL, Apr. 17, 1935.
- (59) Gold, "The Gun Is Loaded, Dreiser," *New Masses*, May 17, 1935.
- (60) TD, "Dreiser Denies He Is Anti-Semitic," *New Masses*, Apr. 30, 1935.

- (61) Kennell, *op. cit.*, p. 252.
- (62) TD, *Notes on Life*, eds. Marguerite Tjader and John J. McAleer (The University of Alabama Press, 1974)
- (63) TD, "The Myth of Individuality," *The American Mercury*, vol. XXXI, Mar. 1934, pp. 337-8.
- (64) TD, "You, the Phantom," *Esquire*, 2, Nov. 1934; I quote from *Theodore Dreiser. A Selection of Uncollected Prose*, ed. Donald Pizer (Wayne State University Press, 1977), p. 290.
- (65) *Ibid.*, p. 286.
- (66) TD, *Editor & Publisher* (n. p., 1940)
- (67) TD to Louise Campbell, Dec. [12], 1943, *Letters*, p. 997.
- (68) TD to Franklin D. Roosevelt, Jan. 5, 1939, *Letters*, p. 829-30.
- (69) 笹本駿二『第二次世界大戦前夜——ヨーロッパ一九三九年——』(岩波新書、一九六九)、『二〇頁。』
- (70) 同右書、一六三頁。
- (71) 不破哲三『スターリンと大國主義』(新日本新書、一九八二)、『八八—九頁。』
- (72) 同右書、九三頁。
- (73) TD, *America Is Worth Saving* (Modern Age Books, 1941), p. 292.
- (74) Joseph R. Starobin, *American Communism in Crisis, 1943-1957* (University of California Press, 1975), pp. 45-6.

「トライサーの一九三〇年代」付録

1929年 (58歳)		1930年 (59歳)		1931年 (60歳)	
11月 別荘「イロキ」新築。 A Gallery of Women を出版。	10月 大恐慌。 J R C 結成。	6月 合衆国共産党第七回大会、党名を共産党に改称。	11月 シンクレア・ルイス、米国初のノーベル文学賞受賞。	12月 My City を出版。	3月 大不況下の国民生活実態視察のため全米旅行に出発。 トム・ムーニーを獄中に訪問。 John Reed Club Answer を発表。 全米旅行よりニューヨークに帰る。 Fine Furniture 出版。
12月	5月 スコッツボロ裁判はじまる。 労働者文化連盟結成。 6月 ワシントンで失業者大行進。	3月 パーティーでシンクレア・ルイスをなぐる。 4月 N C D P P 委員長に就任。 5月 自伝 Dawn 出版。 6月 ストライキ中のピッツバーグ炭坑を視察。 7月 『アメリカの悲劇』映画化をめぐりバラマウント社を告訴。	12月	10月 トライサー委員会をひきいてハーラン炭坑を視察。 12月 Tragic America 出版。	1月 共産党に入党申請し、拒否される。 N C D P P 委員長を辞任。 3月 Hurtan Miners Speak 出版。
		11月 4月 ロンドン軍縮会議。 I U R W 設立。			5月 満州国建国宣言。 5月 ラップ(ロシア・プロレタリア作家協会)解散。

1932年 (61歳)	1933年 (62歳)	1934年 (63歳)	1935年 (64歳)	〔この年各地の大学や研究施設を訪問、科学研究の現状を
7月 大統領選挙にあたり共産党候補支持を表明。 <i>The American Spectator</i> 創刊、編集長格で参加。 サンフランシスコのトム・ムーニー釈放要求集会で演説。 11月 『ジェニー・ゲアハート』映画化権売却。	1月 映画『タバコ』制作のための現地調査でケンタッキー州へ旅行。 4月 ハンフ <i>Tom Mooney</i> 出版。 9月 <i>The American Spectator</i> に “Editorial Conference” 掲載、のちに反ユダヤ主義者として批判される。	1月 <i>The American Spectator</i> の編集を辞任。 3月 “The Myth of Individuality” を発表。 ハンフ <i>Mr. President, Free the Scottsboro Boys</i> を出版。 11月 “You, the Phantom” を発表。 カリフォルニア州知事選に立候補したアプトン・シンクレアのE P I C運動を支持。	4月 “Dreiser Denies He Is Anti-Semitic” を発表。 6月 詩集 <i>Moods</i> 出版。	
チ。 9月 L P G F F 結成。 11月 F D R 大統領選挙で勝利。	3月 F D R 大統領就任、ニユーデイル開始。 11月 ソ連を承認。 12月 禁酒法撤廃。	2月 マデイソン・スクエア・ガーデン集会へ共産党員乱入事件。 『バーティザン・レビュー』創刊。 9月 全米J R C 第二回大会開催。	4月 第一回アメリカ作家会議。 7月 連邦作家計画はじまる。	
散。	1月 ヒトラー、ドイツ宰相になる。 3月 日本、国際連盟を脱退。 11月 ソ連第二次五ヶ年計画。	8月 ヒトラー、ドイツ総統となる。 9月 ソ連、国際連盟に加入。 第一回ソ連作家大会、ソヴィエト作家同盟設立。	6月 第一回文化擁護国際作家会議。 7月 第七回コミンテルン大会、人民戦線路線を採択。 2月 スペイン総選挙で人民	

1941年 (70歳)	1940年 (69歳)	1939年 (68歳)	1938年 (67歳)	1937年 (66歳)	1936年 (65歳)
5月 3月 2月 1月 『<i>To The Writers' League of America</i>』出版。 兄ボールの伝記映画制作権を売却。 『<i>Concerning Our Helping England Again</i>』出版。 『<i>America Is Worth Saving</i>』出版。	11月 〔秋、各地で演説〕 『<i>US Must Not Be Bled For Imperial Britain</i>』を出版。 『シスター・キャリー』映画化権売却。 大統領選挙で共産党候補ブラウダー支持を表明。	11月 3月 『<i>The Living Thoughts of Thoreau</i>』を編集出版。 『<i>The Dawn Is In The East</i>』を出版。	12月 9月 7月 5月 ロサンジェルスに転居。 スペイン救済計画について話し合うためFDRと会談。 パリの国際作家会議で演説、帰途スペイン視察。 『<i>about the War in Spain</i>』に寄稿。 アメリカ作家同盟出版の『<i>Writers Take Sides: Letters</i>』	10月 ウッズホール海洋生物研究所訪問。 〔夏ロングアイランドのカーネギー生物研究所で三箇月過ごす。〕	8月 調査する。』 次期大統領選挙にあたりFDR支持を表明。
9月 第四回アメリカ作家会議。	11月 6月 FDR大統領に三選さる。 FDR中立政策放棄を声明。	9月 6月 FDR中立政策を確認。 第三回アメリカ作家会議。	5月 非米活動調査委員会が連邦議会下院に設置さる。	6月 第二回アメリカ作家会議。	7月 戦線派が勝利。 スペイン戦争はじまる。
12月 6月 ドイツ、ソ連に侵攻。 日米開戦。		9月 8月 3月 独ソ不可侵条約。 ドイツ、ポーランド侵攻。第二次世界大戦はじまる。 スペイン戦争おわる。	9月 7月 ミュンヘン会談。 第二回文化擁護国際作家会議。	11月 7月 日独伊防共協定。 日中戦争はじまる。	